

佐谷・脇田山・古墳調査報告

福岡県粕屋郡所在

福岡県教育委員会

1974

佐谷・脇田山, 古墳調査報告

福岡県粕屋郡所在

福岡県教育委員会

1974

序 文

本学術報告は九州地方建設局の依頼により、福岡県教育委員会文化課において実施した福間バイパス、粕屋東バイパス建設予定地内に位置した古墳を主とする埋蔵文化財の調査記録である。

本県粕屋郡における古代文化の一端を示す資料として、これを後世に伝え、かつ学術資料として活用されることを願うものである。

なお、調査実施に当り、各方面のご協力を賜った事を特記して感謝の意を表する次第である。

昭和49年3月

福岡県教育委員会

教育長 森 田 実

例 言

○ 本調査報告は、さきに刊行した福間バイパス関係埋蔵文化財調査報告にもれた佐谷古墳及び新たに建設が急がれた粕屋東バイパスの一部に位置した脇田山古墳の発掘調査記録である。

福岡県教育委員会文化課	課長	古川善久	森 英俊
	〃 補佐	菅 隆	今井岩男
	〃 技術補佐	藤井 功	
	庶務係長	前田栄一	
	〃 係主事	師岡 満	
調査担当	調査係長	松岡 史	
	調査員	松本 肇	

○なお、調査全期間を通して、福岡県文化財管理調査員、安河内乙代・前田軍治氏及び考古学同好会福岡チブサン会の松本修一氏ご夫妻・前田恵美子・合志幸子・村上千鶴子・坂田マス子の各氏及び、故東和大学講師桑幡一郎氏・九州大学学生東中川忠美・福岡教育大学学生筒井亀・笹山・柴田・古賀・飯笹、岸本・麻生・西依の各氏、地元粕屋町及び古賀町の有志各位の協力を得て、本調査を完了させ得た事を深く感謝する次第である。

○掲載写真は松岡史の撮影にかかり、図面は九州大学・福岡教育大学生諸君及び松岡史の実測にかかり、製図は松岡史、前田軍治、同恵美子の両氏がこれに当り、出土資料の整理に関しては、合志幸子、前田恵美子、村上千鶴子、松岡操各氏の協力になることを付記して感謝の意を表する次第である。

また、本書の原稿執筆及び編集は松岡史が、その責を負うものである。

佐 谷 古 墳

本 文 目 次

1 環境	5 頁
2 構造	5 頁
3 遺物の配置	9 頁
4 遺物	13 頁
5 考察	26 頁
6 その他の遺物	26 頁

挿 図 目 次

第1図	佐谷古墳附近地形図	3 頁
第2図	佐谷古墳墳形実測図	6 頁
第3図	佐谷古墳内部主体実測図	7 頁
第4図	佐谷古墳墳丘断面図	8 頁
第5図	佐谷古墳遺物配置図	9 頁
第6図	佐谷古墳装身具類実測図	11 頁
第7図	佐谷古墳鉄鎌実測図	14 頁
第8図	佐谷古墳内部主体出土鉄刀実測図	14 頁
第9図	佐谷古墳馬具実測図	15 頁
第10図	佐谷古墳墳丘中出土 須恵器子持大型高杯実測図	17 頁
第11図	佐谷古墳玄室出土 須恵器実測図	17 頁
第12図	佐谷古墳紡績車実測図	19 頁
第13図	佐谷古墳墳丘出土須恵器大型器台実測図	20 頁
第14図	佐谷古墳墳丘上出土須恵器実測図	21 頁
第15図	佐谷古墳須恵器甕実測図	22 頁
第16図	佐谷古墳須恵器実測図	23 頁
第17図	佐谷古墳須恵器、土師器実測図	24 頁

図 版 目 次

- P L 1 (1 佐谷古墳遠望
2 同上
- P L 2 (3 佐谷古墳全景
4 同上
- P L 3 (5 佐谷古墳墳丘
6 同上
- P L 4 (7 佐谷古墳墓道と墳丘上の土器類
8 墳丘上 土器遺存状況
- P L 5 (9 佐谷古墳墳丘断面 (点線以上は後世の盛土)
10 墳丘内 須恵器出土状況
- P L 6 (11 佐谷古墳 墓道に置かれた土器
12 同上
- P L 7 (13 佐谷古墳 玄室内 土器 鉄鏃出土状況
14 佐谷古墳 耳環 釧 出土状況
- P L 8 (15 佐谷古墳 装身具類
16 釧 耳環 コハク腕玉 ガラス小玉
- P L 9 (17 佐谷古墳 装身具 碧玉管玉 水晶玉 メノウ玉 ガラス玉
18 土玉
19 滑石製 玉類
- P L 10 (20 佐谷古墳 鉄鏃
21 鉄刀
- P L 11 (22 兵庫鎖 馬具
23 滑石製 紡錘車
- P L 12 (24 須恵器 子持大型高杯
25 須恵器 大型器台
- P L 13 26 須恵器 甕
- P L 14 (27 須恵器 甕
28 須恵器 俵形壺
- P L 15 /29 須恵器類 土師器類
- P L 16 (30 旧石器時代 遺物 上段右 ナイフ型石器
31 縄文時代 石器

脇田山古墳

本文目次

1 環境	47頁
2 構造	47頁
3 副葬品の配置	49頁
4 遺物	49頁
5 考察	64頁
6 その他の遺跡	64頁

挿図目次

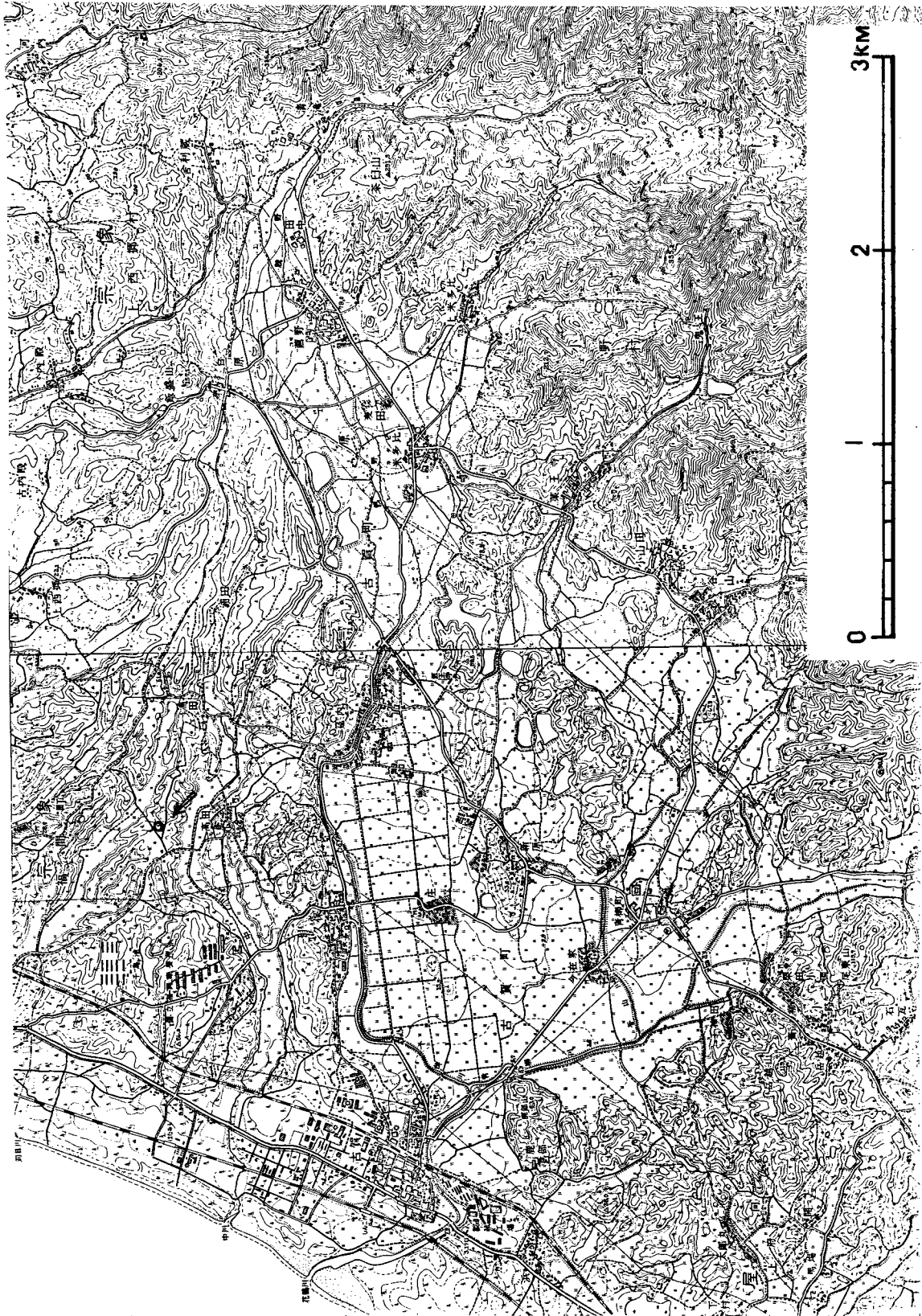
第1図	脇田山古墳附近地形図	46頁
第2図	脇田山古墳 墳形実測図	48頁
第3図	脇田山古墳 内部主体実測図	折込み
第4図	脇田山古墳 遺物配置図	50頁
第5図	脇田山古墳 装身具類実測図	52頁
第6図	脇田山古墳 鉄鏃実測図	53頁
第7図	脇田山古墳 武器類実測図	54頁
第8図	脇田山古墳 馬具実測図	56頁
第9図	脇田山古墳 馬具実測図	57頁
第10図	脇田山古墳出土 須恵器実測図	60頁
第11図	脇田山古墳出土 須恵器実測図	61頁
第12図	脇田山古墳出土 須恵器実測図	62頁
第13図	脇田山古墳出土 紡錘車 弥生式遺物実測図	63頁

図 版 目 次

- P L 1 (1 脇田山古墳と周辺地形
2 脇田山古墳を西側から見た墳丘
- P L 2 (3 脇田山古墳墳丘と墓道
4 墓道と墳丘裾との置石(手前は羨道)
- P L 3 (5 脇田山古墳 石室
6 脇田山古墳 羨道
- P L 4 4 (7 玄室内遺物出土状況
8 玄室内遺物出土状況
- P L 5 (9 玄室 遺物出土状況
10 玄室 遺物出土状況
- P L 6 (11 脇田山古墳玄室内遺物出土状況
12 脇田山古墳玄室内遺物出土状況
- P L 7 (13 脇田山古墳玄室内遺物出土状況
14 脇田山古墳玄室内遺物出土状況
- P L 8 (15 脇田山古墳 装身具
16 脇田山古墳 鉄鏃
- P L 9 (17 脇田山古墳 鉄刀
18 同上
- P L 10 (19 脇田山古墳 刀子及び刀装具
20 脇田山古墳 鉄鉾同石突
- P L 11 (21 脇田山古墳 馬具
22 脇田山古墳 馬具
- P L 12 (23 脇田山古墳 馬具
24 脇田山古墳 馬具
- P L 13 25 脇田山古墳 土器
- P L 14 26 脇田山古墳 土器
- P L 15 (27 脇田山古墳 土器
28 脇田山古墳 紡錘車

佐 谷 古 墳

所在地 福岡県粕屋郡古賀町大字筵内字佐谷



第1図 佐谷古墳附近地形図

佐 谷 古 墳

所在地 福岡県粕屋郡古賀町大字筵内字佐谷

1 環 境

粕屋郡と鞍手郡の境をなす犬鳴山の山脈が北に延びて、宗像郡・粕屋郡の境界をなす附近の西麓地域は、低平な段丘地形をなし、この段丘を開漸して扇形に谷が形成されている。

本古墳はこの段丘地形の南端に近く、段の原から千鳥池に延びる段丘が、高田部落の北方で弓形に湾曲する部分の頂点に位置し、さらに伝説に知られる千鳥ヶ池の水源に面してもいる。

段丘北側は黒薄の谷に面し、南側は中川とその流域をなす水田地帯を距てて高田・久保長崎の段丘と対している。

本段丘は東に連らなり飯盛山を経て犬鳴連山に接続する。この飯盛山を要に北側段丘の上西郷古墳群、その南の浦田段丘には両谷の前方後円墳を含む古墳群、そして佐谷古墳の含まれる千鳥段丘の古墳群、南端の筵内・久保の段丘上の古墳群があり、宗像・粕屋の両群の境にまたがる大古墳群の各支群が前述の古墳群である。

この地域は中世、宗像を本拠とする宗像代と粕屋の立花城を拠点とする大友代との間に争奪が行われ、或時は宗像に、又大友側にとその支配が移り変わった所でもある。古代においては新宮までは宗像の領域であり、古墳群の在り方を見ても宗像の古墳群の一支群であったと見るべきであろう。

本古墳上に立てば、西は玄海灘を望見し、周囲の展望が佳良であり、墳頂で海拔38m、段丘面で36mを計り、今は荒廃した本古墳も築造当時は高さもあり、目立つ存在であったろうが、古く石材採取のため掘られ、さらに第2次大戦の際には国防のため、墳丘を3分割するように散兵壕が設けられていた。

段丘は洪積世の海成段丘であり、表土、赤褐色ローム層、礫混り黄褐色層と堆積し、下部は花崗岩質風化層が不整合に重なる。この第2層上に縄文期の遺物、第2層赤褐色ローム中に旧石器時代遺物が遺存したと思われ、古墳々丘中及び周囲に遊離して、これらの遺物が検出された。

2 構 造

千鳥段丘上に先ず石室構築用土坑とこれに続く墓道が主軸を西に向けて掘られ、玄室部は約50cm、墓道は漸次浅く周壕外縁に接して地表に至るよう掘られ、玄室は奥で2.5m、羨門部で2.2m、奥行3.5mの長方形坑をなしている。墓道は幅員1m、長さ7mである。

玄室奥壁は、基底部幅 1.2m、高さ 1.1mの外に向ってふくらみをもつ三角形をなし、基底部で厚さ0.45m の花崗岩を直立させて用いていた。側壁については全く遺存しないため、不明であるが、玄室部土坑底は平坦であり、大形石材を使用した形跡はなく、石材採取の際の取り残しと思われる石材からして、小石材を小口積みにしたものと思われる。

袖石については、羨門部側に南北 2 個分の稍大きめの立石の痕と思われる凹みが見られ、この外側、即ち墓道側に框石を横たえたいし長方形の凹みが見られた。

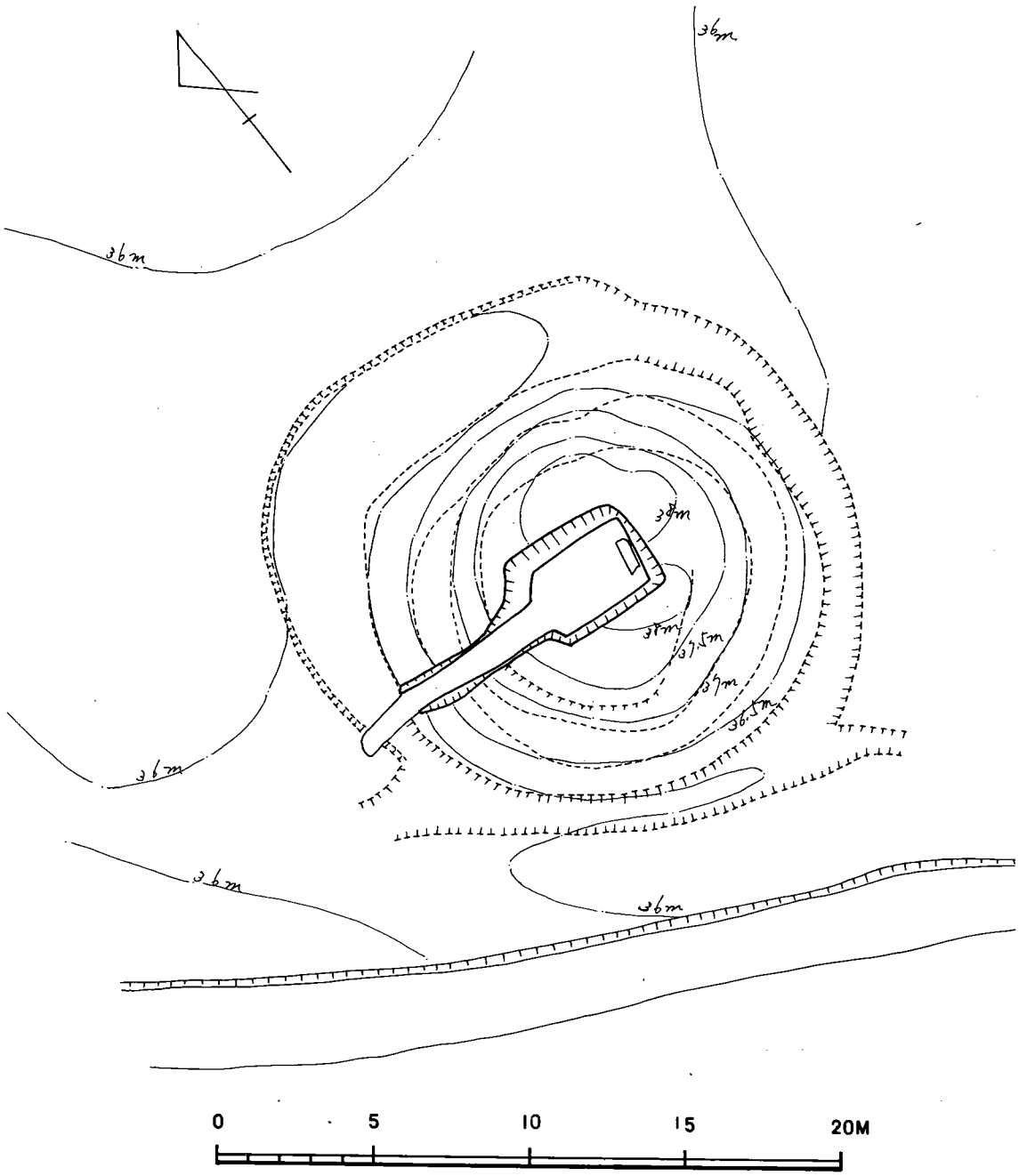
墓道には石を置いた形跡はなく、従って羨道はなく、墓道から直ちに玄門に至る構造であったと思われる。

玄室床面には稍偏平な礫を敷き詰めて礫床を形成していた。しかし石材採取により相当数が遊離していた。敷石の遺存状況から判断して玄室は羨門部で幅1.45m、奥壁で幅 1.6m、奥行 2.25m程度の広さであったと思われる。

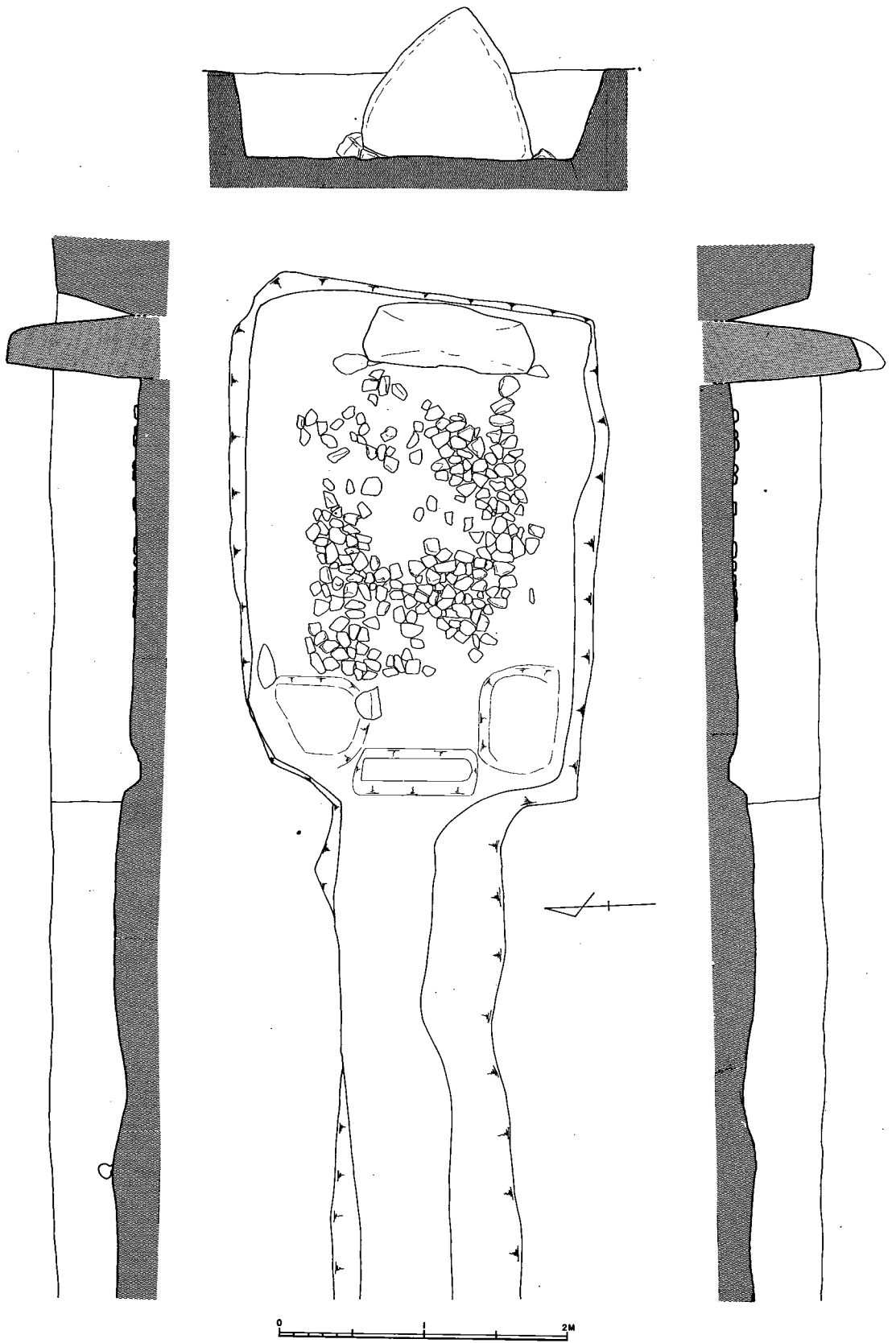
この規模は封丘に比較して稍小さく感じられ、横穴式石室としては古い形式をもつものと考えられる。

次に外部施設としての封丘であるが、内部主体構築用土坑の掘り上げた土砂を土坑周囲に置き、その上に周壕部の土砂を盛り上げたものと思れる。つまり封土を採取した跡が周壕となったものであろう。この事は周壕の深さ及び幅が一定ではなく場所により差異が見られることから考えられる。墳丘は二段に形成され、下段の上には土器類が置かれていた。

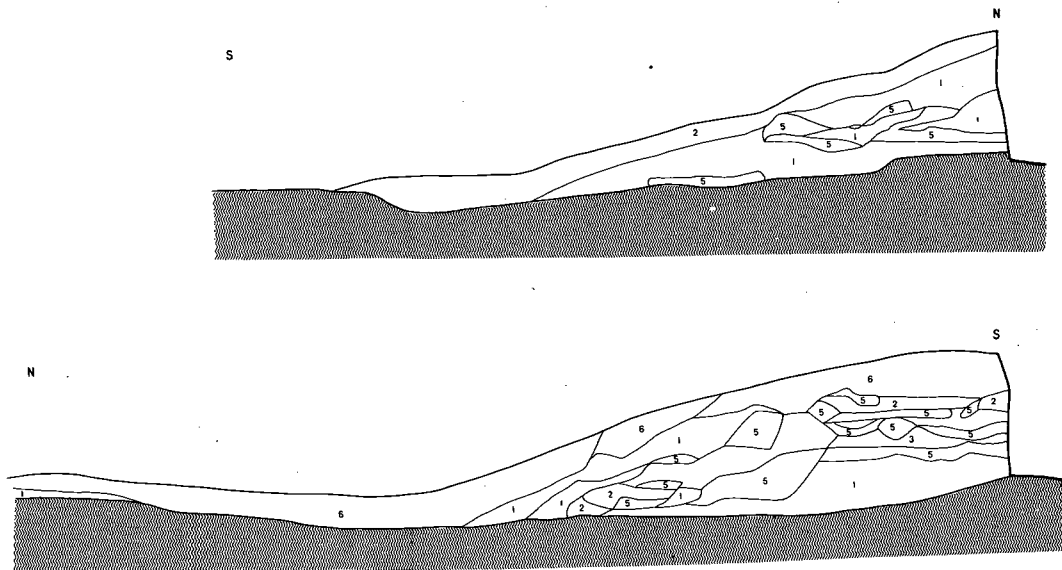
本古墳の正面は墓道の開く西側であり、西側周壕は南端が分離して更に南に延びる形勢を示し、これが旧い道であったことを思わせる。従って墓道は道に開いていたのであり、この道は現在も古墳西側にある段丘稜線を通る道の前身であると考えられる。



第2図 佐谷古墳墳形実測図

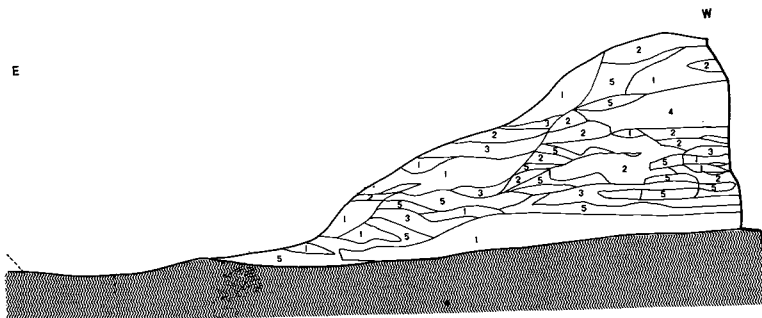


第3図 佐谷古墳内部主体実測図

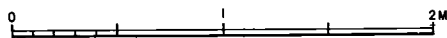


土層説明

- 1 褐色
- 2 暗褐色
- 3 赤褐色
- 4 赤褐色混土
- 5 暗黒色
- 6 黒褐色有機土



第4図 佐谷古墳墳丘断面図

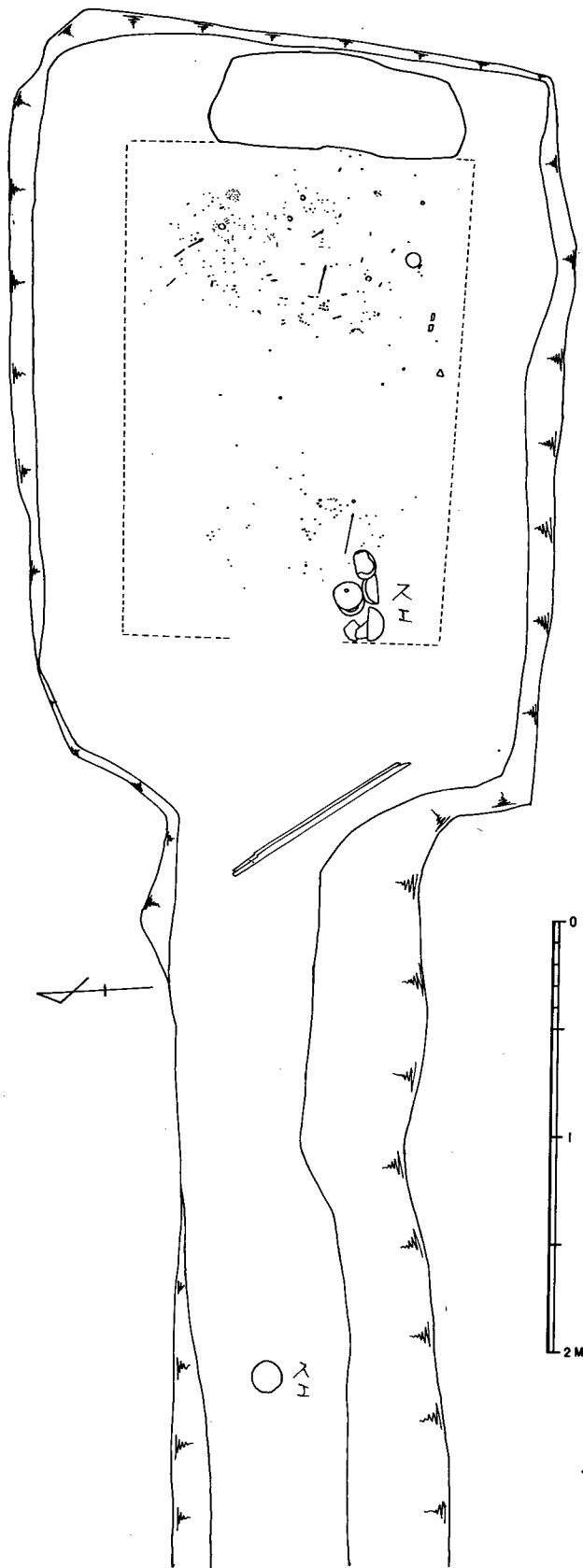


3 遺物の配置

後世の激しい攪乱を受けている状況下では、確実な副葬品の配置について言及することは困難であるが、内部主体における副葬品の配置状況を見れば次のとおりである。

玄門右手、即ち南壁側に須恵器類が一括して置かれ、南壁沿には鉄製武器類、馬具類が、これら須恵器類と並ぶように置かれていたらしい。しかし武器類は数本の鏃を除き何れも玄室の石材除去後の埋土中に比較的集中した状況で検出された事から前述の如く想定したのである。

玄門から一歩足を踏み入れた辺りは、滑石製平玉・同角玉・同白玉が散布していた。玄室中央部附近は、敷石も乱れが甚だしく、遺物の検出も僅かであり、数個の玉類が散って



第5図 佐谷古墳遺物配置図

たのみである。

玄室奥壁から玄門に向かって約80cmまでの範囲は最も濃密な装身具類の散布を見た所であり、南壁沿いに銅地銀鍍金釧1ケがあり、銅地銀鍍金耳環2ケ、同じく金張耳環2ケが、北壁との間に散り、碧玉製管玉・メノウ丸玉・同ナツメ玉・ガラス製コバルト色玉・ガラス製の黄色、水色、コバルト色の微小な玉が散布していた。就中微小玉は北壁側に密集して検出された。又この範囲には数本の鏃が見られたが遊離したものであった。

次に鉄刀2振が重なって墓道から玄室部土坑の境に床面から50cm高く遺存した。詳細に見れば、刀身に鏃による損傷が刃部に並行に数ヶ所にわたって見られ、更に一振は刀身先端部を失い、この失われた刀身の一部が、玄室南壁沿いに見られた鉄器片群中にあった事から、本来南壁に並行に置かれていたものが、石材採集の際に掘り上げられ、既に石材を抜きとった玄門部に捨てられたものと考えられる。

玄室内における副葬品の配置は全て攪乱を受けたものであり、微小な遺物を主体に遺存した事から、本来の埋葬のあり方は推定の域を出ないが、一応、被葬者は耳環が2対見られた事から2体であり、南側の被葬者が金張耳環と刀を着装し、更に管玉も多くこの部分に集中した事から管玉も南側被葬者のものと考えられる。

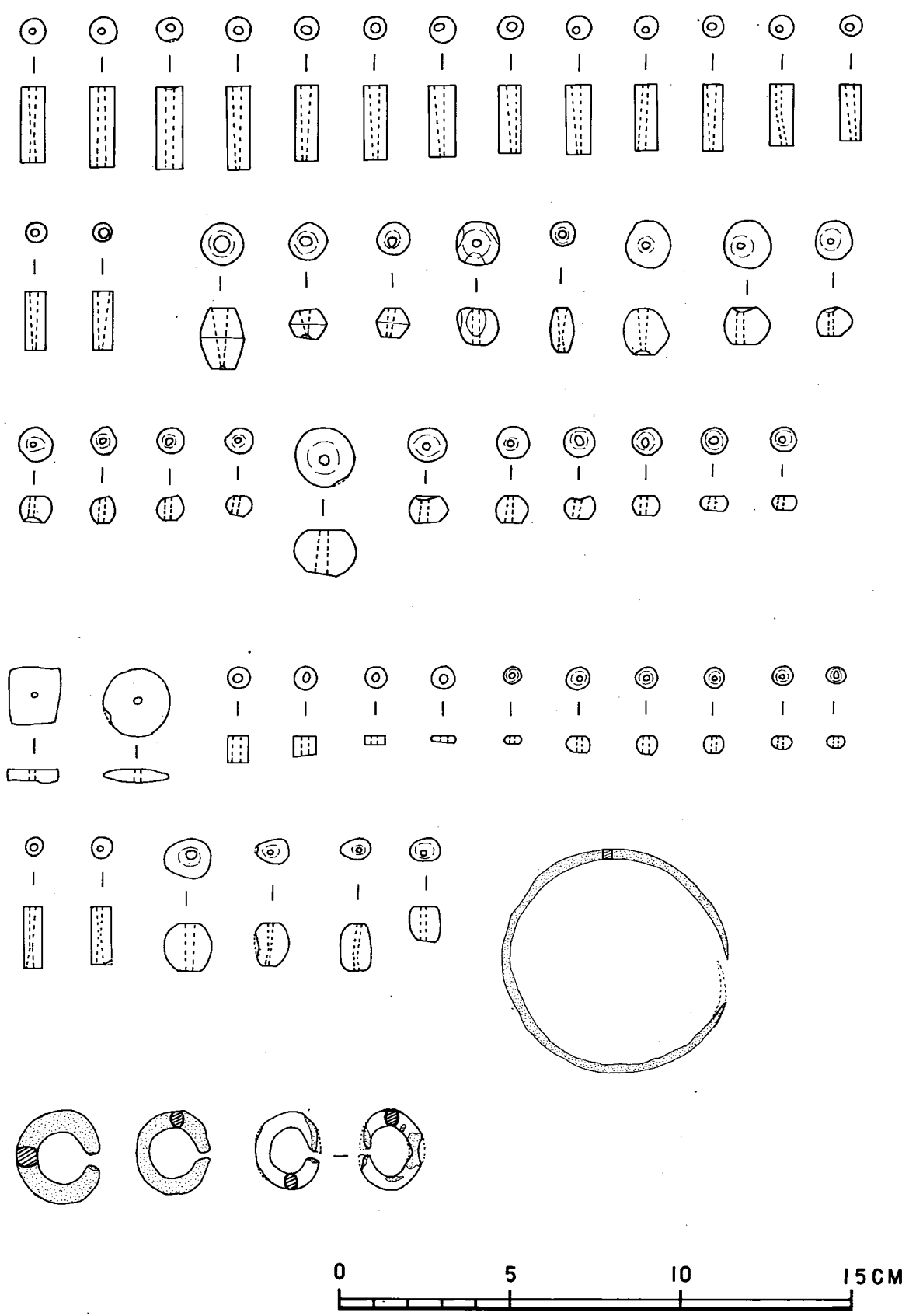
北側被葬者については 耳環、ガラス玉、メノウナツメ玉を着装したらしく、微小ガラス玉の散布が、頭部と思われる位置に濃密に見られることから、頸飾りよりは玉を綴じ付けた布を頭部に着用したものではないかと考えられる。

以上の如く、装身具類から考えて被葬者は頭部を奥壁に向け、即ち東枕に二体並列して置かれたものと推定される。

次に外部から検出された遺物について述べる。墓道底面に須恵器小壺1個が転倒して検出された。墓道の埋土中の下部から須恵器杯1個と滑石製紡錘車1個があった。

墓道北側封土中に大形の須恵器子持高杯・蓋杯・土師器杯があり、同南側には須恵器甕・俵形壺が、掘り据えられた状態で遺存したことは、古墳築造途上に祭祀が行われてことを物語る。

墓道の北側及び南側の周壕底から、須恵器甕・杯・大形器台・土師器杯・高杯が破砕して検出された。特に大形器台は墓道北側に集中していた。墓道南側封土中に据えられた甕は何れも底部に破孔を有するもの計りであった事は、祭祀に際して実用性を故意に失わしめた器材を以てした事を窺わせて興味深いものがある。



第6图 佐谷古墳装身具類実測図

4 遺物

装身具類

耳環 銅地金張耳環 2 個、稍細目の銅環に金を被覆したものである。

銅地銀鍍金耳環 2 個、前者に比較して稍太目の銅環に銀鍍金を施したものであるが、土中において銀分が風化して、今は灰色の痕跡を残すのみとなっている。

耳環は何れも着装の便を考えて一方に数ミリ程度の開きを有する。

釧 断面方形を呈する細身の銅環に銀鍍金を施したものであり、現在は風化が甚しく、一部は欠損しているが、径65ミリを計り、成人の腕に着装できるものであり、出土位置が余り動いていないとすれば、上膊部の着装とも考えられる。

管玉 碧玉製17箇 16箇は濃緑色の碧玉製であり、緒通しの孔は基本的には一方から穿孔されている。残りの1箇は白緑色を呈し、風化の進んだ管玉である。

ナツメ玉 メノウ製、透明度の高い赤味の強いオレンジ色を呈する小形の玉である。

丸玉 メノウ製、オレンジ色と血色があり大小5箇からなる。

二重円錐台形玉 透明の水晶製 3 箇、中央部に横に稜をもち、円錐台を底面を合せて上下に重ねた形態をなし、切子玉の稜をもたないものと思えばよい。(ソロバン玉)

トンボ玉 ガラス製で紺色地緑色簀入丸玉 1 箇と緑色地白色簀入丸玉 1 箇がある。

丸玉 ガラス製コバルト色47箇、青緑色 1 箇からなる。

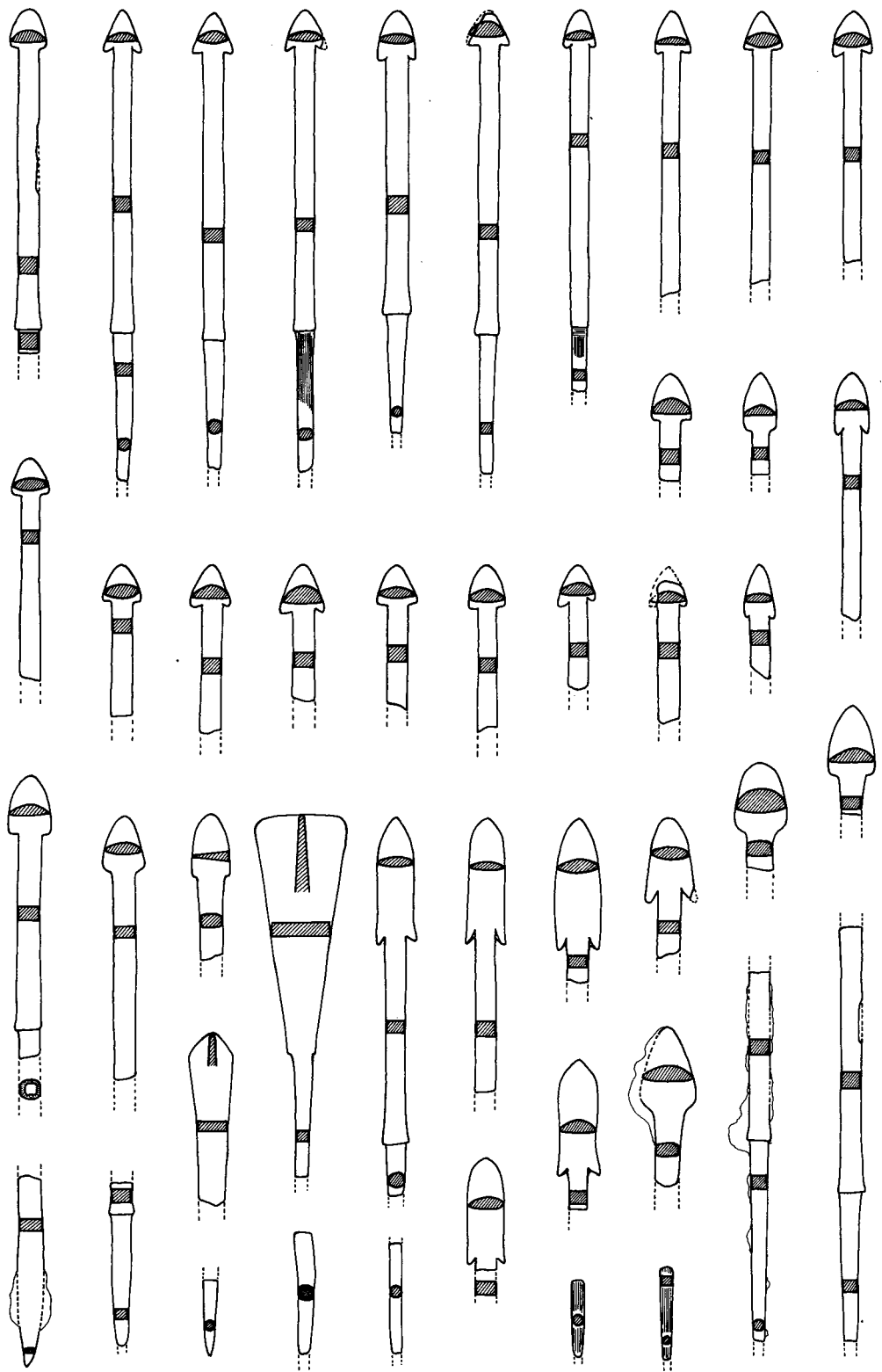
小玉 ガラス製 黄・緑・青・紺の各色からなり、径 2 ミリから 5 ミリ、厚さ 1 ミリから 3.5 ミリに至る微小な玉 279 箇からなっている。

ナツメ玉 コハク製 7 箇、その名の通りの色を呈しているが、表面風化し、かつ扁平になる程磨滅したものがあり、手頸に着装したものかとも思われる。

平玉 滑石製 径 2 cm、厚さ 3 ミリの円板状をなす。

角玉 滑石製 15 ミリ平方、厚さ 3 ミリの方形をなす。

臼白玉 滑石製、大小厚薄の差はあるが、円筒を輪切りにした、厚目の円板形をなし、殆ど磨滅が認められない。これら滑石製玉類については、玉類と言うことで一応装身具の項で解説してはいるが、その出土状況からして装身具とは考えられず、玄室内に被葬者を葬った際の祭祀における「玉串」と考えられ、玄門から玄室内に榊の枝等にこれら滑石製玉類を垂下した「玉串」を奉獻したものではなかろうか。



第7図 佐谷古墳鉄鍔実測図

武器類 何れも鍛鉄製である。

鎌 尖根鎌35、広根鎌1の36本が確認されたが、石室の破壊攪乱が著しいため実致は不明としか言えない。

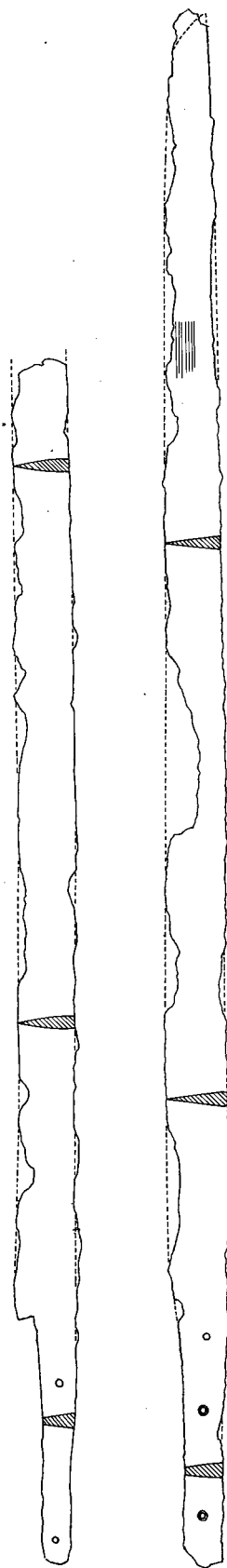
尖根鎌は先端部が三角形に近い平面を有し、一面は平坦で、他面が盛り上る断面を有し、ノカツギが10cm程度の長さをもち、断面方形で、中茎が5cm以上の長さをもち、矢柄の着装部に桜皮を巻いているものが大部分を占めている。

先端部が前者に比較して稍長く、この断面が刀身断面の如く鋭角三角形をなすものが1本ある。平面形は前者に近く、断面形が半円形をなすもの。先端半截の紡錘形をなし、基部に逆刺を有し、断面形が紡錘形をなすもの。これと同形に近いが、逆刺が外反するもの。細身の剣菱形をなすもの等があり、広根鎌は先端の開く撓形鎌である。

直刀 2振

平造り、芒子は丸、刃関までの刀身長79cm、身幅38ミリ、棟厚9ミリ、中茎長19cm、刃関から斜めに切り上りつつ細くなる中茎に目釘穴3ヶを有し、尻は圭頭形をなす。刀身は腰から僅かに内反りの気味がある。外面に鞘の本部の錆付きがあり、鞘の木目は柃目である。刀身棟厚は錆のため厚くなっているのだから本来は多少薄いものと考えられる。

他の一振は、刀身の四分の一を失い全長は不明、平造り、身幅36ミリ、棟厚8ミリ、中茎長15.5cm、目釘目2ヶ、刃関から直角に上り中茎尻にかけて少し細くなり、方形に終る。腰から稍強めの内反りが見られる。

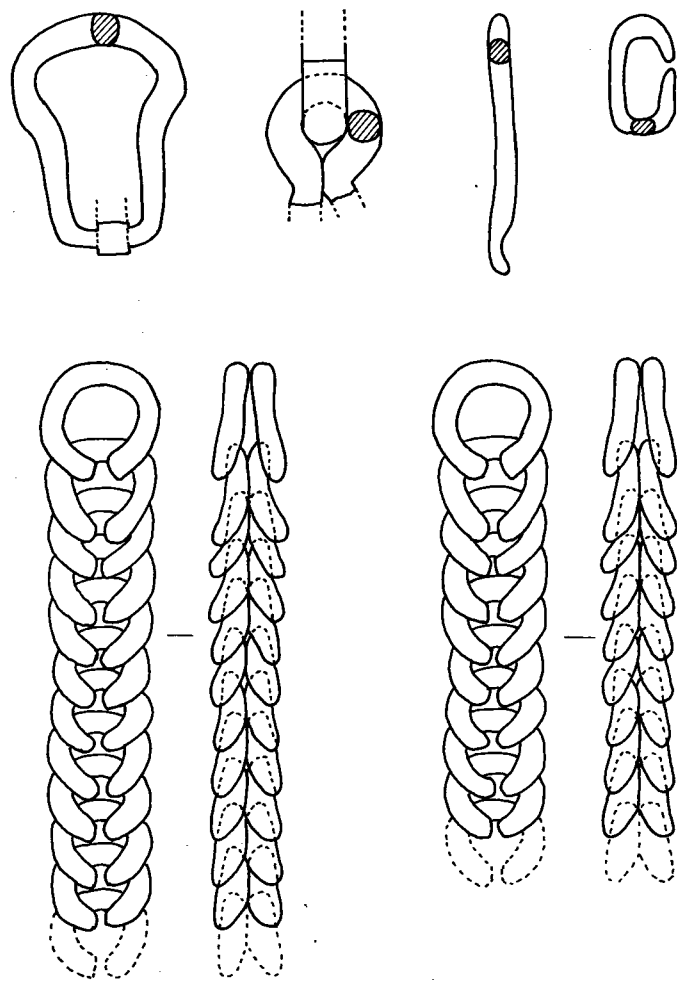


第8図 佐谷古墳内部主体出土鉄刀実測図

馬具類

帯金具・尾錠・クツワ・兵庫鎖の断片が見られるが、鎖を除いて他は全形を明らかになし得ない。

鎖は8字形の鉄輪を交互に重ね、8字の両端を合わせて輪にした鎖である。この手の鎖は、通常アブミの懸垂に使うものであるが、本古墳の鎖は細く、かつ 小目目であるので、アブミ用か否か不明である。



第9図 佐谷古墳馬具実測図

土器類

玄室内出土須恵器

広口壺 広口の高さに比較して胴径の大きな小形壺であり、内1箇は肩衝形、他は稍なで肩であり、前者はツマミをもつ蓋をかぶって検出された。この蓋は口唇内面に段をもつもので、壺の胴径と同口径であり、元来は別の器の蓋である。広口壺の蓋と考える小形の2ヶ杯が同時に出土し、内1箇は壺と同質であり、口唇の大部分を欠き、一方壺の頸部に蓋の口唇部が焼付いているので、蓋をした儘で焼成された事を物語る。他の蓋は壺と焼成を異にしているが、蓋は共に口唇内に段をもち、「二」字形のヘラ記号を有する。

杯 口唇内面に段を有し、外面に一条の沈線を周らし、稍軟質の焼成である。

以上が玄室内に置かれていた土器類であり、何れも6世紀前半に比定される須恵器3B式と考えてよい。

墓道出土土器類

須恵器小口壺 墓道中央部に転倒して検出されたもので、稍外開きに立ち上る口と胴径が高さより大きな丸肩に二条の沈線をもつ、底面に「x」字形のヘラ記号をもった焼成良好な壺である。

須恵器ハソウ 墓道埋土中に杯と共に出土した。胴径より口径の大きな、かつ高さも高い朝顔花形の口部をもち、口縁は段をもって外に開く。口部外面中央に近く一条の沈線をもち、胴部中央に孔を有するハソウである。

須恵器杯 口唇部に段をもち、口縁下部に沈線状の段をもつ須恵器杯である。

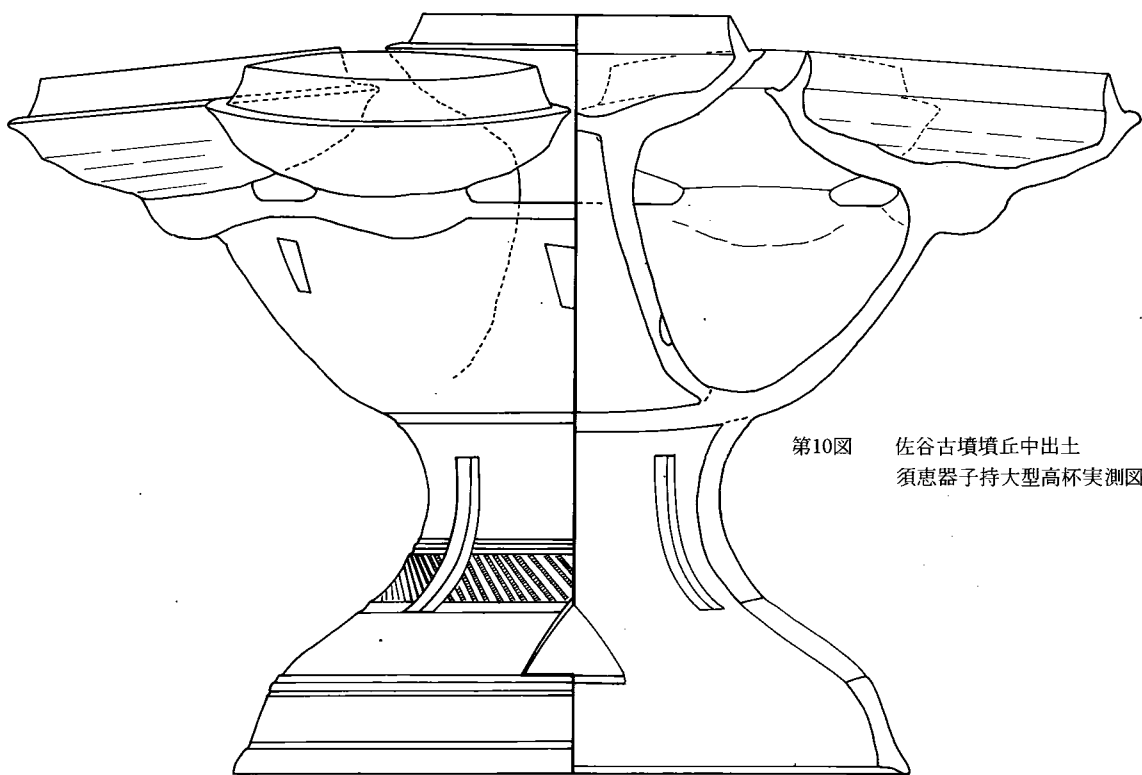
墳丘及び周壕底出土土器類

須恵器子持大形高杯 外開きの脚部には各4ヶの長方形透孔を上段に、三角形透孔を下段にもち、上から二条一組の沈線、次に一条、次に二条一組、最下に一条の沈線を施し、その間を櫛歯による連続波状文と押捺文とで飾る。杯部口縁に今は3ヶのみ残る杯をのせ、中央に杯と同径の高杯を立てたもので、口縁にのる杯はその間隔から6ヶであったと思われ、合計7ヶの杯が花形に展開する。台になる大形高杯の杯部には、ヘラによる方形の刻文があり、元来透し孔を設けるためではなかったかと思われる。杯の形態は3B式である。

須恵器大形器台A 大形の半球状の杯部と円錐台形の脚部からなり、焼成時の変形が見られ、又自然釉が見られて焼成は良好である。

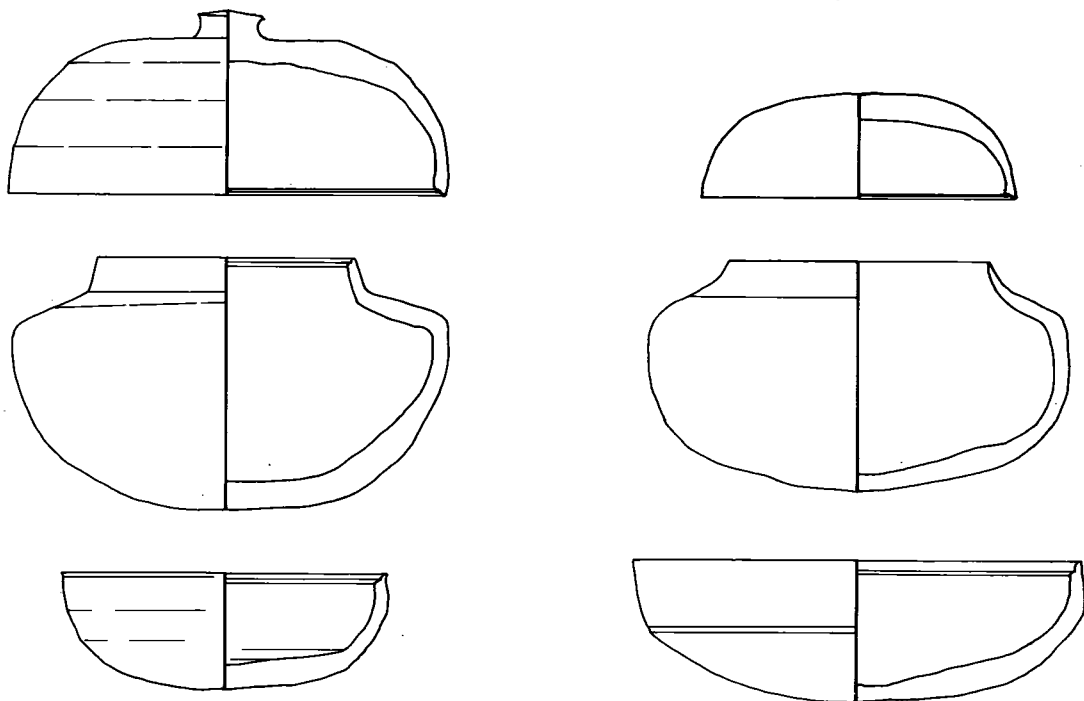
杯部口唇は、稍肥厚し、その直下外面に二条の沈線を一組とする竹節状の装飾を2段に施し、その間に連続波状文をもつ。

杯部と脚部の境は節状に段をもち、櫛歯押捺文が見られる。脚部は上記沈線により五段に分



第10図 佐谷古墳墳丘中出土
須恵器子持大型高杯実測図

0 5 10 15 20CM



0 5 10 15 CM

第11図 佐谷古墳玄室出土 須恵器実測図

けられ、裾を除く各段に連続波状文、120度方向、即ち全周を3分割する如く 長方形透孔、その間に三角透孔を設ける。

須恵器大形器台 B 前者に比較して僅かに高く、杯部も浅い。この部分の内面には同心円叩文が残り、外面には二重沈線を二段に施し、その間を連続波状文で飾る。脚部は竹節状2重沈線により6段に区切り、上から四段までは連続波状文、五段目は櫛歯押捺文で飾り、裾は無文である。裾以外の各段に全周を四分割して、上から三段までは長方形透孔、その下二段は三角形透孔を設けている。焼成は良好で自然釉を見る。

須恵器甕 A 球形の器体に強く外反する口縁部を付け、口唇は三段に沈線で区切られ、かつ肥厚している。器壁外面は平行刻目による叩文、内面は同心円叩文が看取されるが、外面は刷毛状の横線が残り、本来の叩文は消されている。内面は平滑になるように仕上げられ、焼成は良好である。底部は破片がなく、調査時に厳しく追求したが発見できなかった。その理由は墳丘上に据えられた状況で他の甕・俵形土器の底部が遺存したにもかかわらず、底の破片がないのは底を抜いた甕類を置いていた事を物語る。

須恵器甕 B 前者と同じ器形であり、大きさも同じと言える。ただ口唇が前者に較べて単純であり、器面調整も同様である。内面の同心円叩文は消されず、焼成は稍軟質である。

須恵器甕 C A .B に較べて稍大形、焼成は良好過ぎて却って器形が変形している程である。器表には自然釉が見られ、これが風化している。器面調整はBと同様で内面叩文は同心円である。

須恵器甕 D 胴部下半を失っている。焼成良好で器面調整もB .Cと共通である。

須恵器俵形壺(ほとぎ) 卵形の胴部をもち、器形は横長となり、長軸と直交する短軸側に外反する口縁部を付け、口唇部は肥厚し、一条の稜が見られる。器の上半部は飴色の自然釉が美しくかかり、釉は長軸方向に流れることから、焼成時に卵を立てた如き状況で窯の中に置かれた事を物語る。器面は凹凸ある櫛歯の刻目を平行にもつ叩文、内面は同心円であり底部は失われている。

須恵器杯 散布して出土しているので、蓋と身の組合さったものではなく、破片を復原した結果も組合さったものが見られないことは、元来別々に使用されたことを窺わせる。

蓋には口唇内面に段をもつが、その段も角が崩れた印象を受ける。ヘラ記号は認められない。杯身は、口縁部が薄く、この立上り内面に明瞭な境界線を有するもので、焼成も良好なものと、器全体が焼成不良で、かつ器壁が重厚な作りのものに大別される。両者共に器面調整はヘラによる横ナデの痕を残し、編年的にはⅢB式であり、他の器種の編年とも矛盾しない。

須恵器広口壺 墓道北側墳丘中に子持高杯に接して検出された。玄室内出土のそれと同形同大であり、蓋と共に焼成され形跡を留め、底面に「三」字形にヘラ記号を有する。

土師器蓋杯 赤褐色の胎土をもち、器表に黒ウルシをかけ、平滑に仕上げている。

蓋は外面口縁下に一条の沈線をもち、口唇は滑らかに作られ、身の作りは須恵器のそれと同一であり、口縁部の立ち上りの内面に境界の線が見られる事まで、規を一にしている。

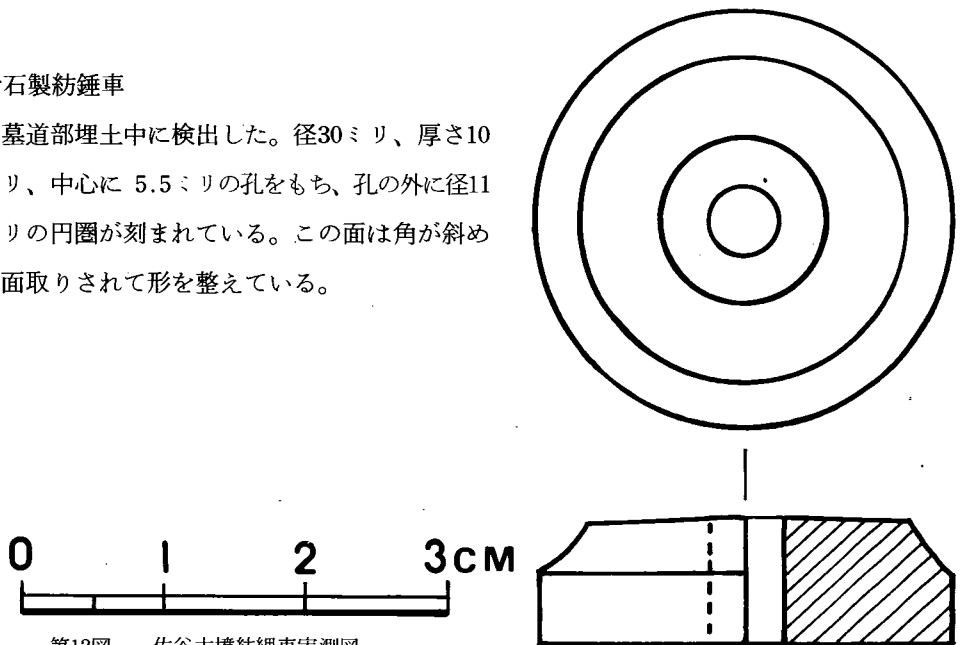
土師器盃 赤褐色を呈し、胎土に少量の砂が混入し、軟質である。外に開きながら立ち上る口縁は、稍内反り気味で、胴部半球形を呈する。

土師器高杯 浅く外に開く口縁部と浅い半球形の杯部を支える脚は、低く外に強く開く。赤褐色を呈し胎土は精良、器面は磨研仕上げとなっている。

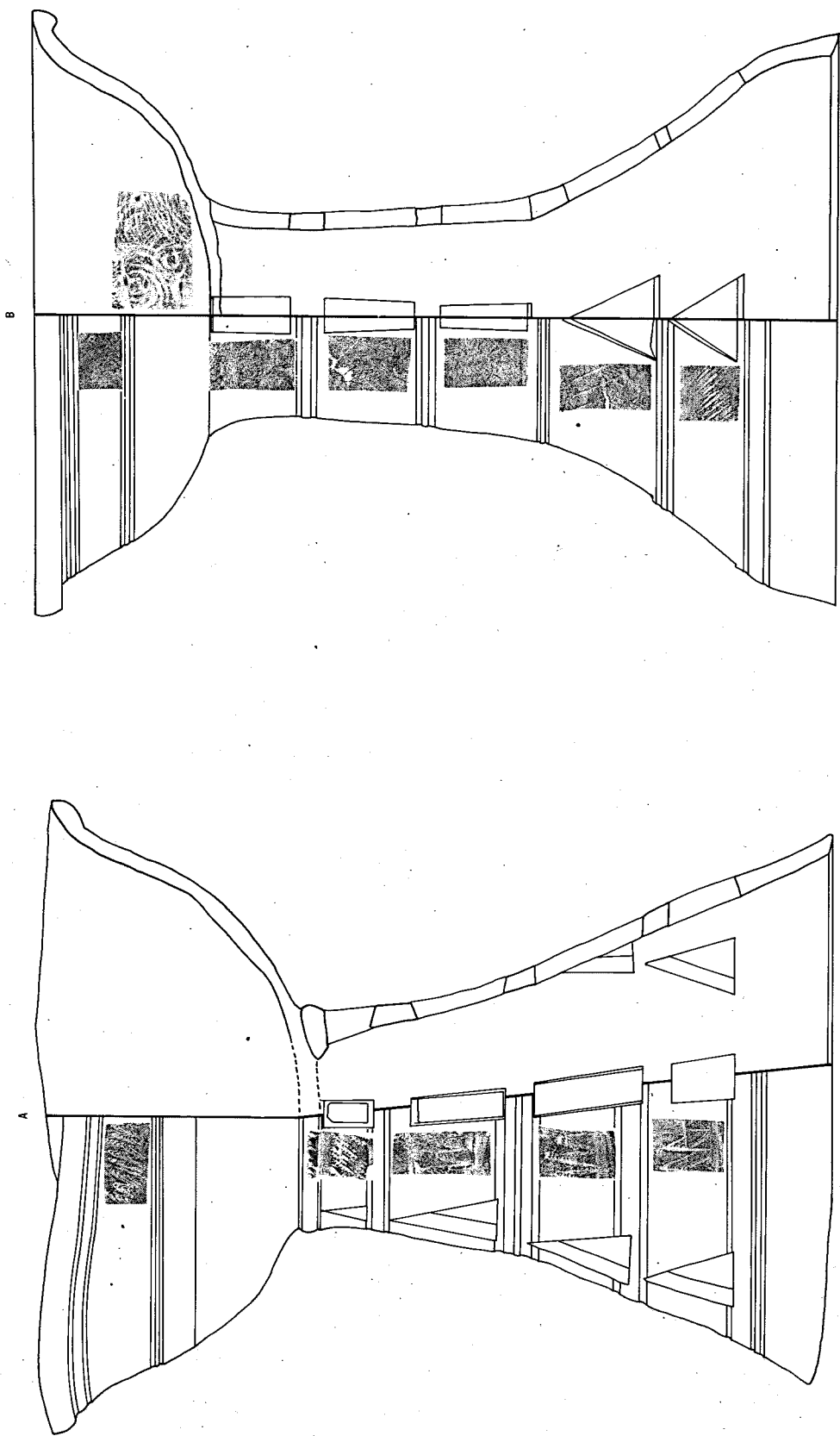
土師器高杯 杯部を失ない高い脚部のみである。円柱形の上部と強く外開きの裾からなり、内面にヘラ仕上の際の削り痕が稜線をなしている。胎土焼成共に前者と同じである。

滑石製紡錘車

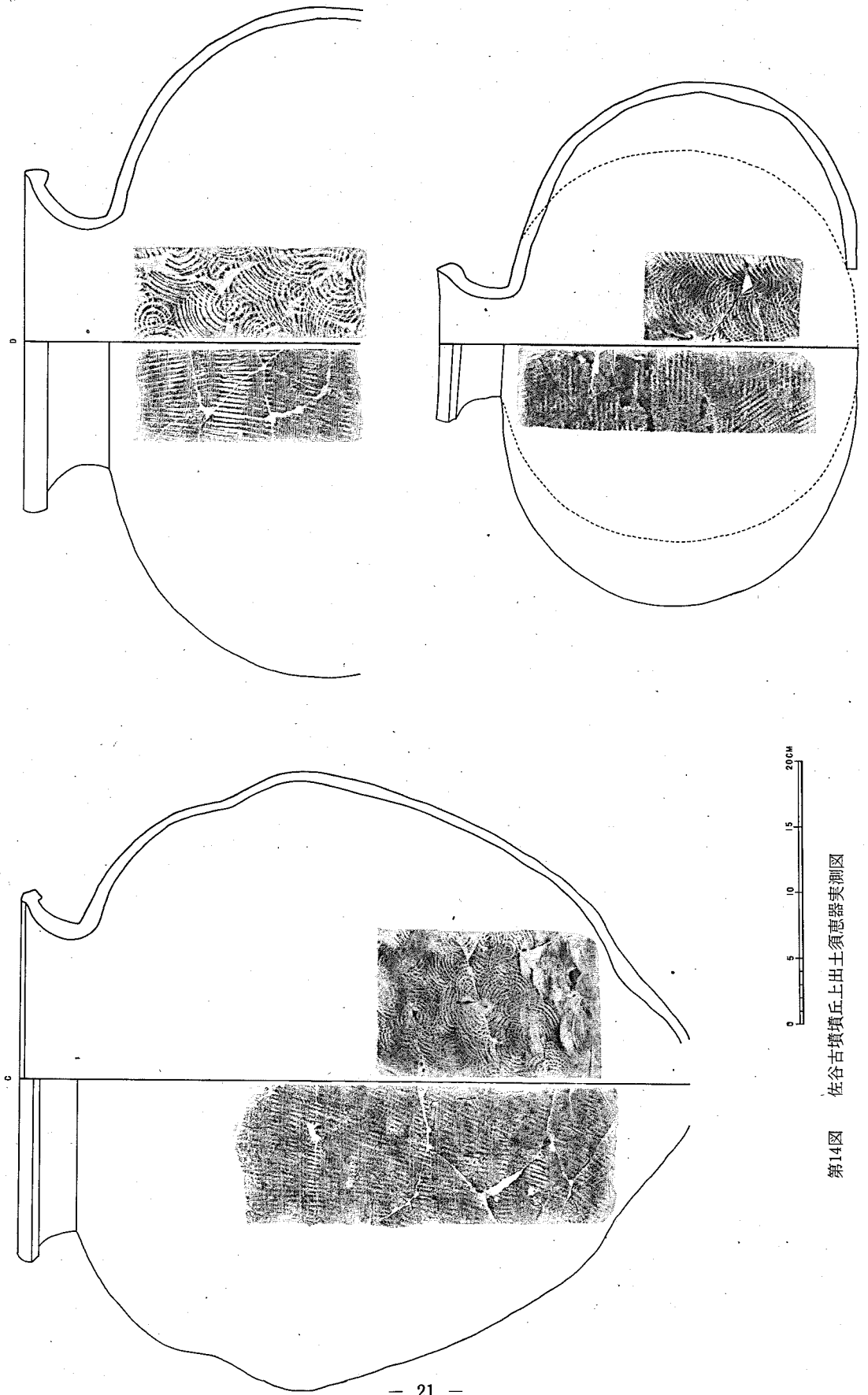
墓道部埋土中に検出した。径30ミリ、厚さ10ミリ、中心に5.5ミリの孔をもち、孔の外に径11ミリの円圏が刻まれている。この面は角が斜めに面取りされて形を整えている。



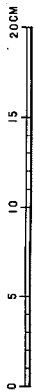
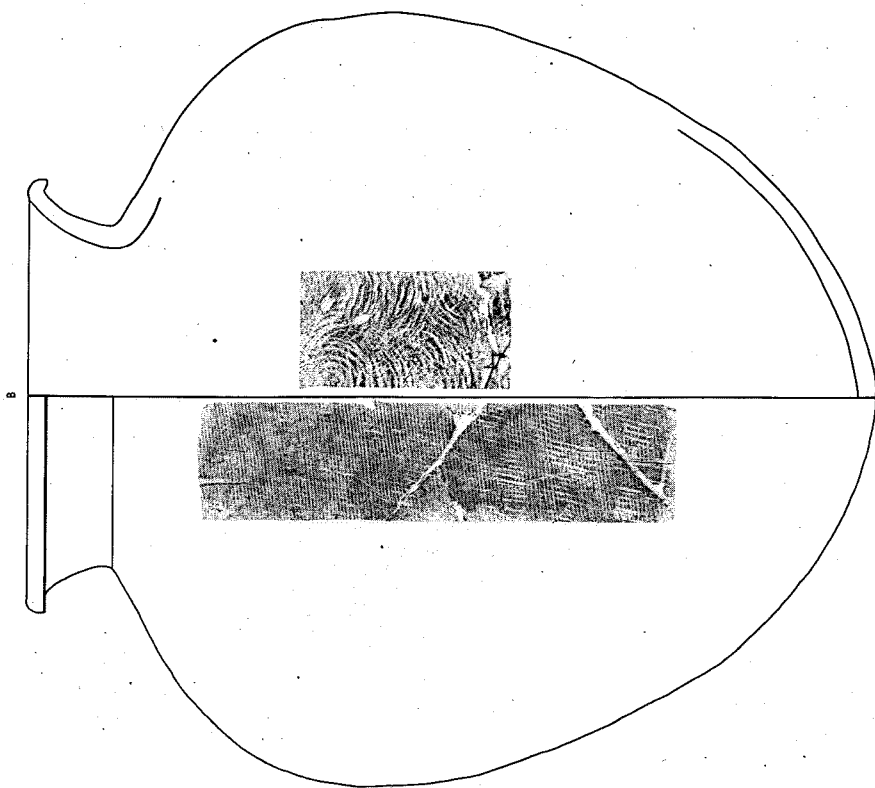
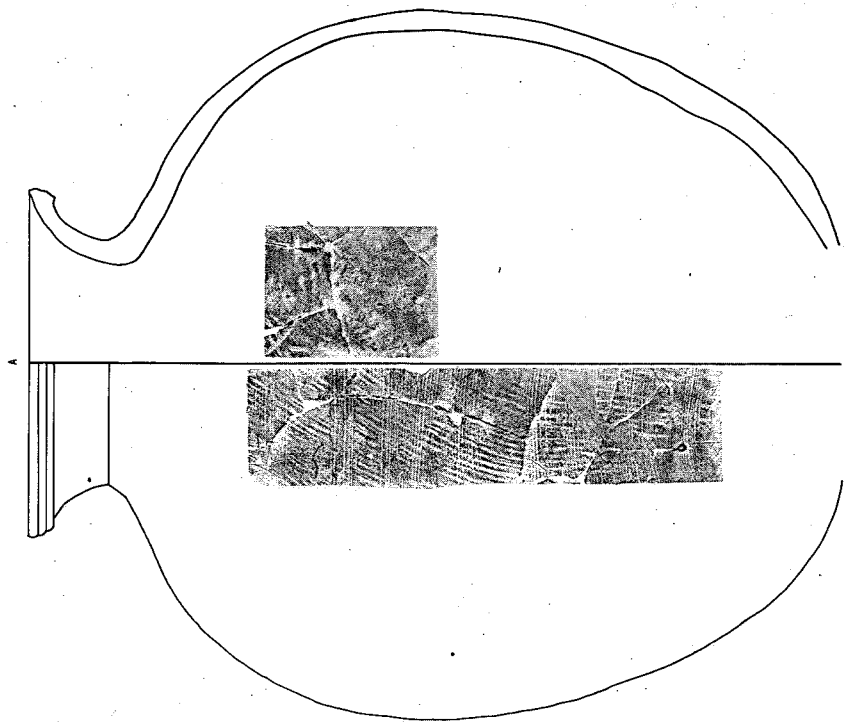
第12図 佐谷古墳紡錘車実測図



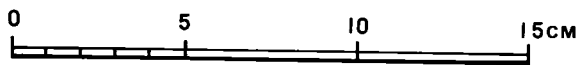
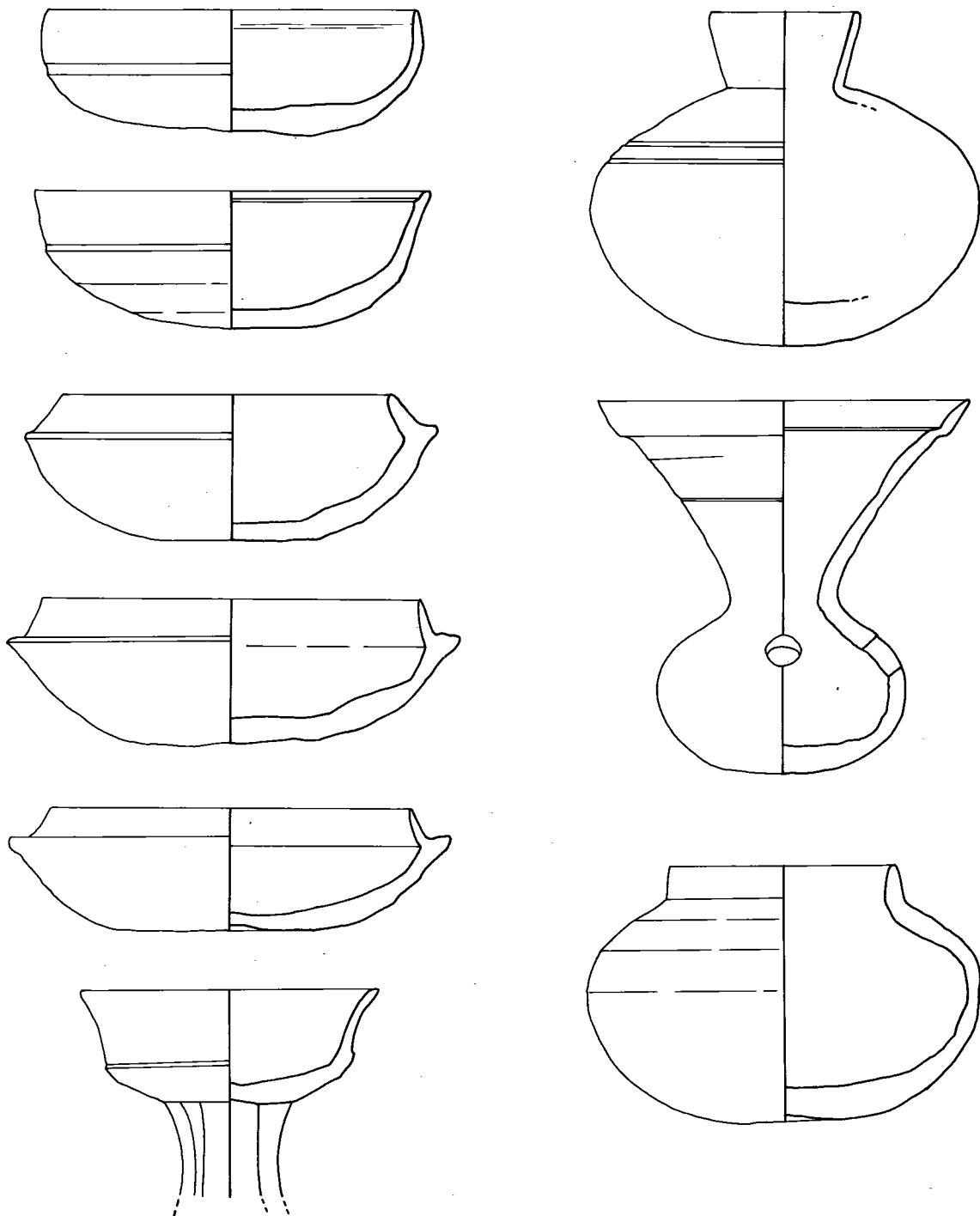
第13图 佐谷古墳墳丘出土須惠器大型器台実測图



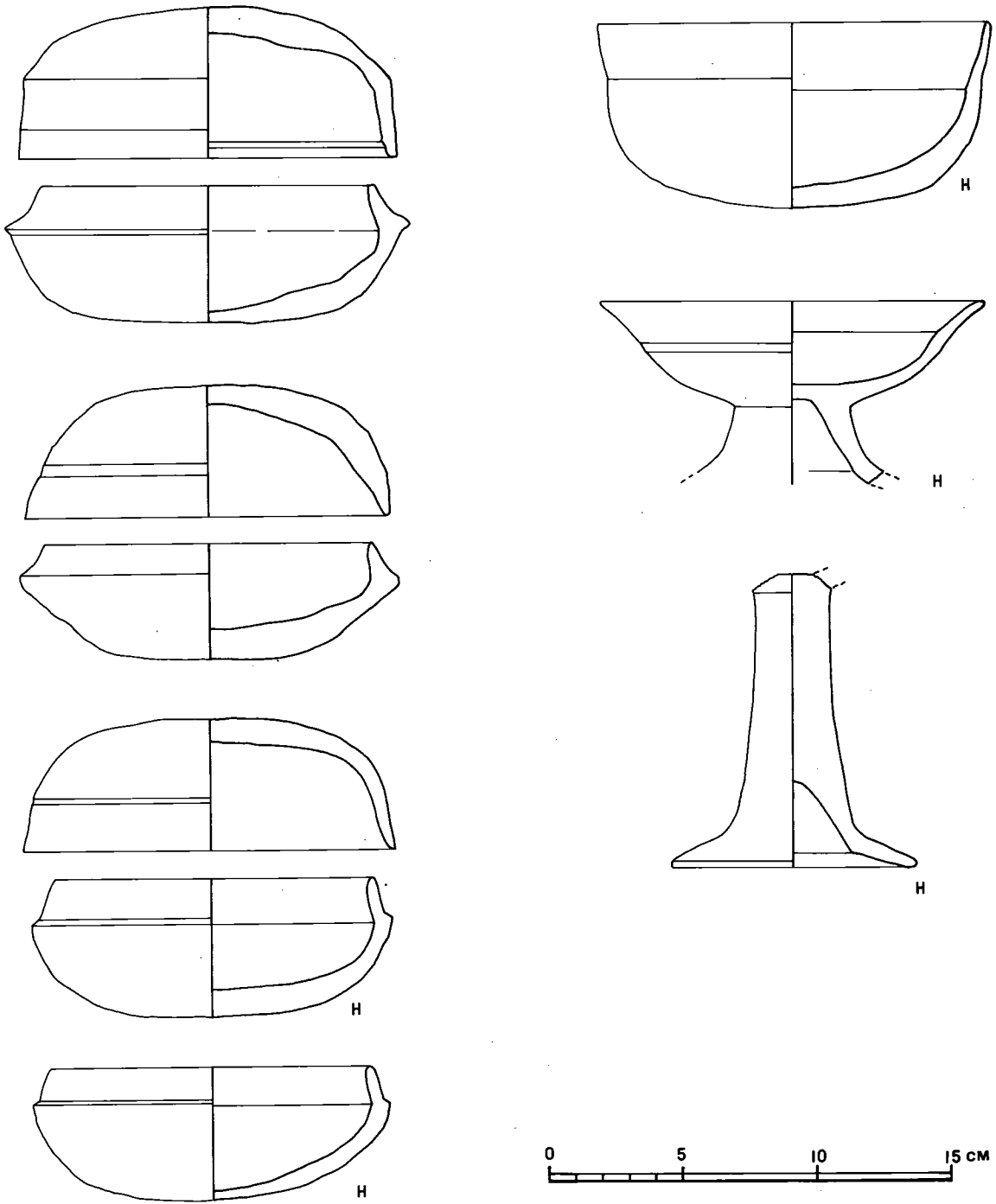
第14図 佐谷古墳墳丘上出土須恵器実測図



第15図 佐谷古墳須恵器甕実測図



第16図 佐谷古墳須恵器実測図



第17図 佐谷古墳須恵器、土師器実測図

5 考 察

佐谷古墳の内容について以上述べて来た。本古墳が粕屋郡・宗像郡の境界附近に展開する古墳群に属することは、その立地から既に述べた所である。この古墳の築造された6世紀代における葬地は、生産活動の実施し難く、かつ生活の本拠に近い地域で、自己の属する地域集団の勢力圏内に営まれた事は想像に難くない。さらに加えるならば、墳墓群は当時の氏族制を考える時、当然その氏族の占拠する地域内の特定の場所に集中的に営まれた事が考えられる。

飯盛山から西方に指向して展開する丘陵地が、前記の諸条件に合致するものであり、この上に営まれた古墳群の各支群が、各々の氏族に属するものであったであろうと想像する。

本古墳は西に開口し、丘陵上の古道に連続する事を思えば、この道が古賀町久保や筵内に連らなるものであり、中世筵内庄として知られる平野にその生産活動を営んでいた人の奥津城であったと思われる。そして彼らは大きな地域集団として宗像西郷の地域に属していたものであろう。

被葬者が二体であり、武器を所持し、乗馬の風習をもつ、当時としては、その地域の上層階級に属する家族であったと思われる。

埋葬時の祭祀については、墳丘築造途中に須恵器等を置いて、即ち「斎瓶を掘り据え」た祭りが行われ、更に玄門を鎖す時に「玉串」を捧げた葬送儀礼が行われたことを物語っている。

内部主体の割に墳丘が大きい事は、六世紀前期における古墳の在り方として時に見かけることではあるが、壮大な墳丘を築き得た被葬者の、経済的・政治的力を物語るものであろう。

6 その他の遺跡

佐谷古墳の発掘中、墳丘盛土、周壕の堆積土中に石器とその製作時の剝片を検出した事から、段丘上には、石器時代の生活が営まれていた事が判明した。

旧石器時代 表土層直下の褐色ローム層に包含されていたと考えられる黒燿石製ナイフ型石器の断片と剝片が見られる。

ナイフ型石器 先端及び刃部の中ばから基部に向って欠損している。縦剝ぎの黒燿石製石刃の打面側を先端にしているため、打面及び打コブは成形の際に失われている。打面を上に見た時、石刃の左側に刃潰しを加え、右側の第一次剝離面の鋭いエッジを刃部にしている。表面の水和層（Patination）が発達して光沢が相当失われている。後期旧石器時代も終末に近い頃に属するものと考えられる。

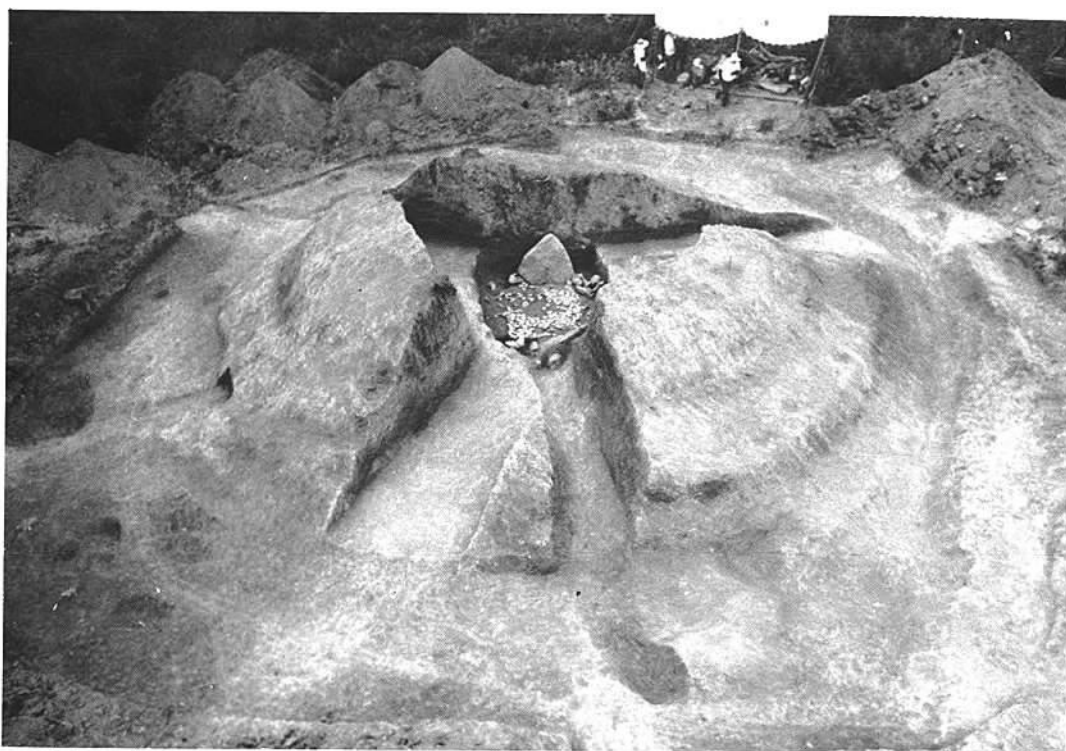
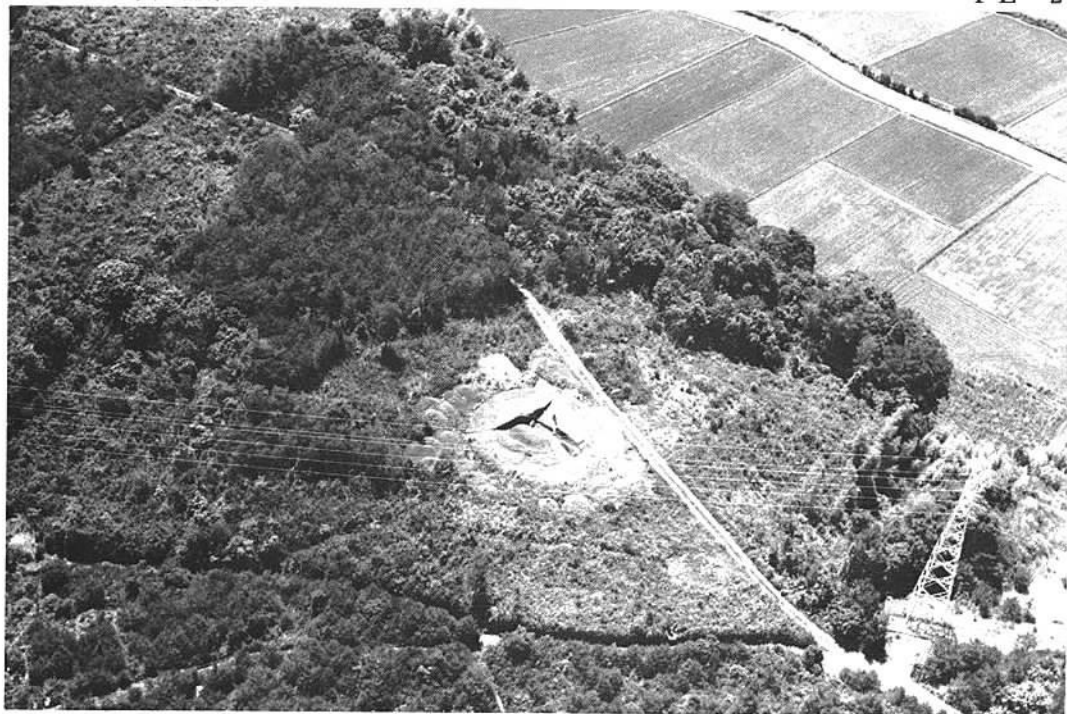
石器時代 前者と同じく遊離した状況で黒燿石及びサヌカイト製打製石鏃が検出された。基部の挟り込みの深いもの、中程度のもの、浅いもの、三角形をなすものの四種類があり表面の

水層の発達具合から見て、縄文時代前期と考えられる。

以上の事から本古墳が、複合遺跡であり、旧石器・縄文・古墳の三時代の重複が見られた訳である。

佐谷古墳図版







6 同 上



8 墳丘上 土器遺存状況



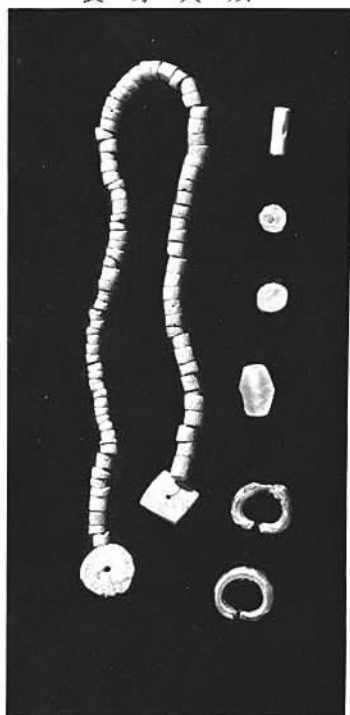
10 墳丘内 須恵器出土状況



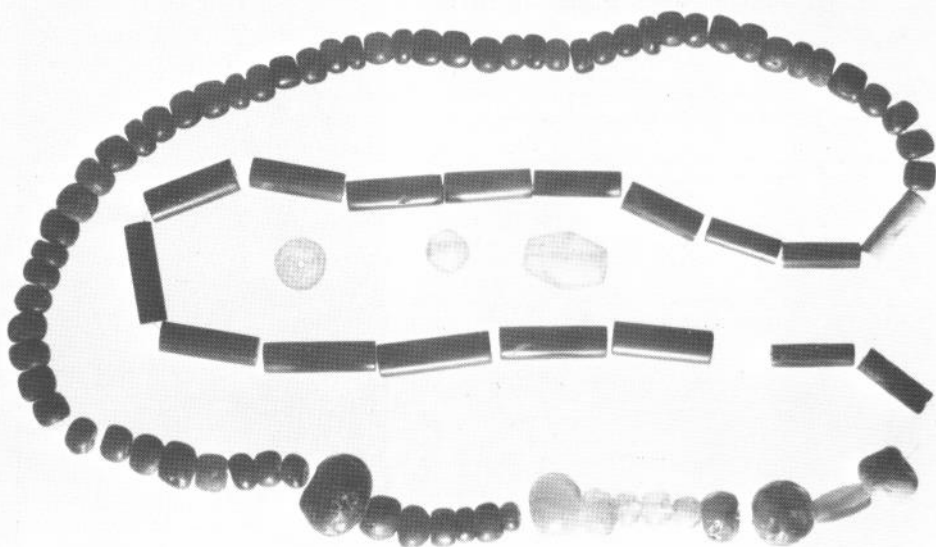
12 同 上



14 耳環、釧出土状況



17



碧玉管玉・水晶玉・メノウ玉・ガラス玉

18

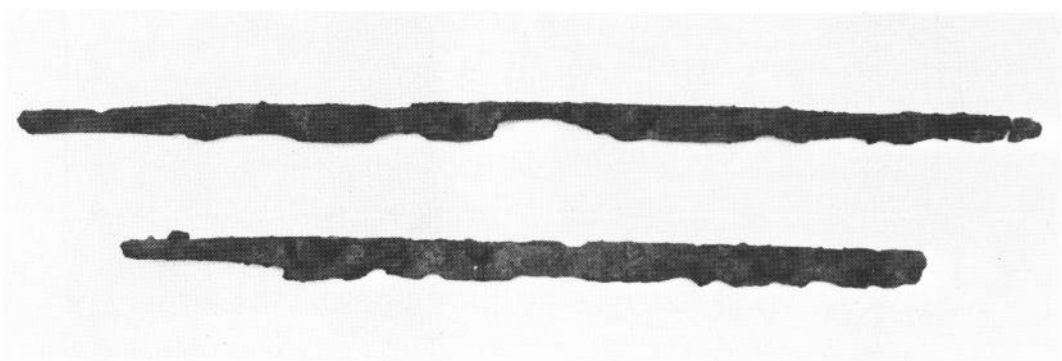
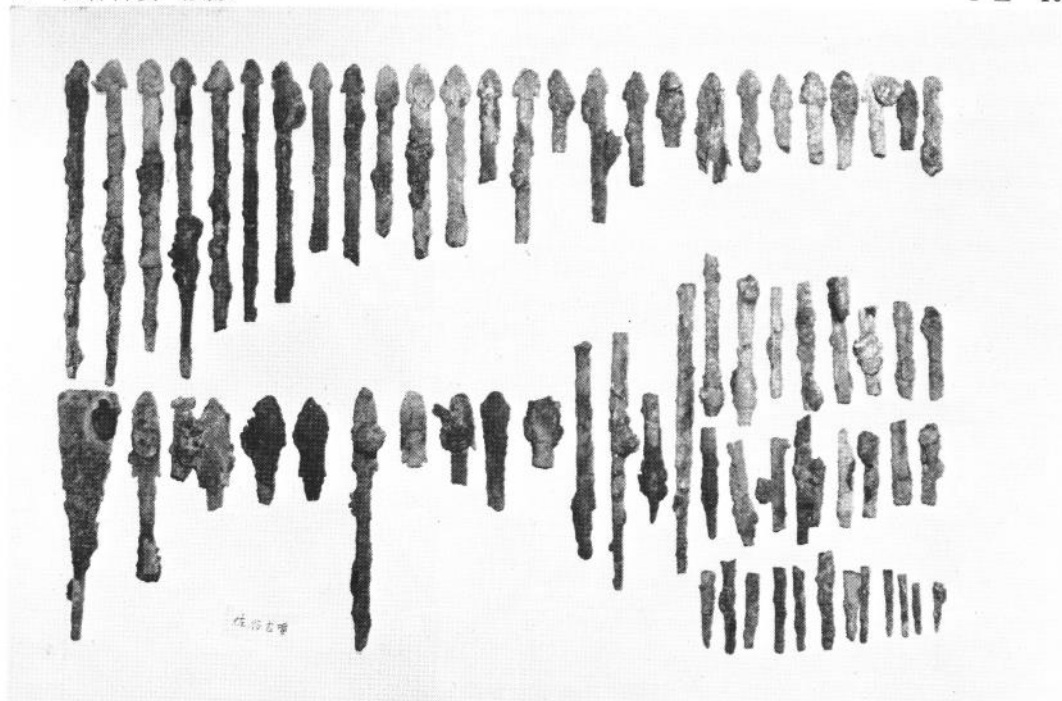


土玉

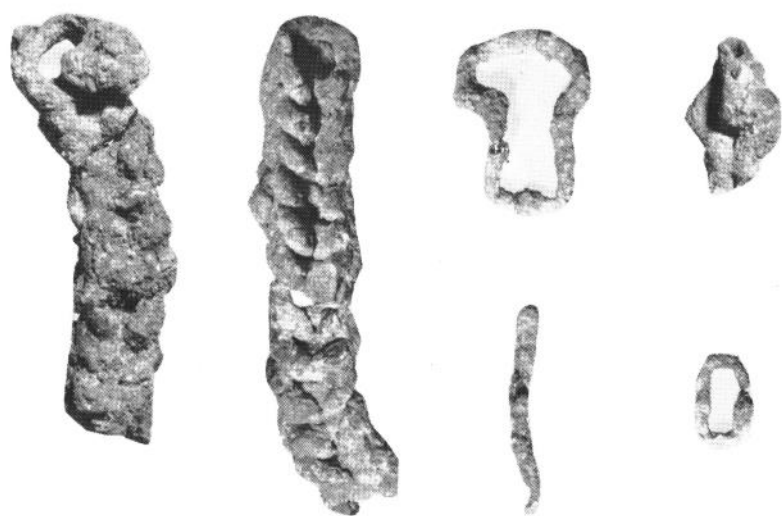
19



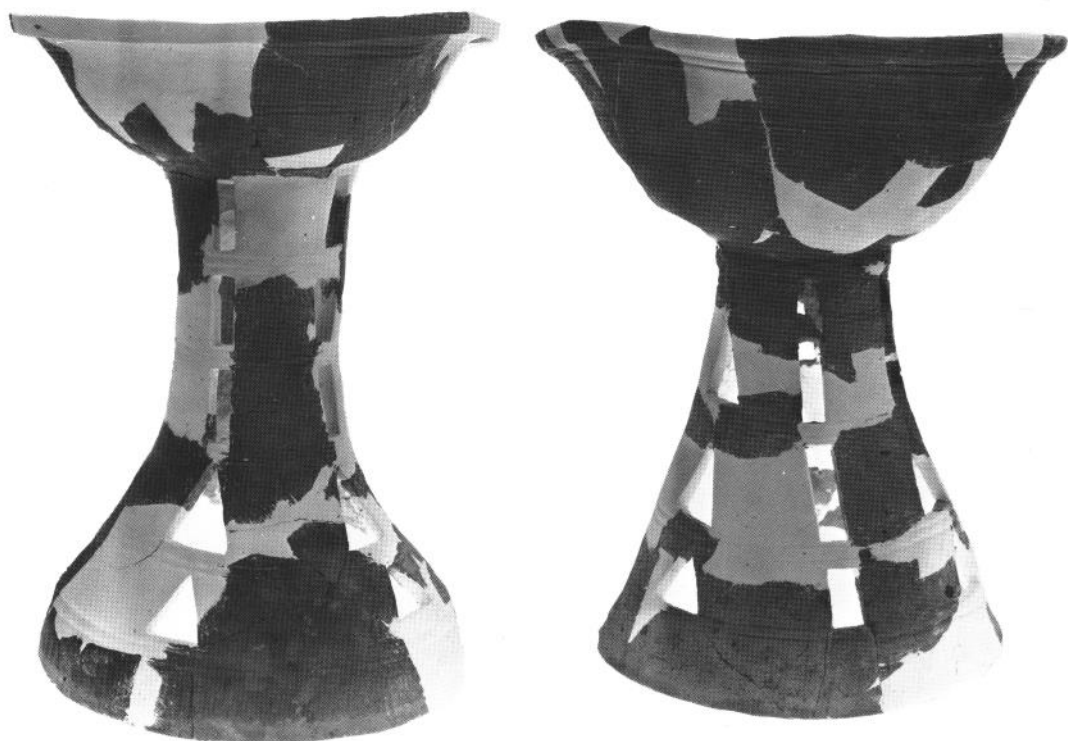
滑石製玉類



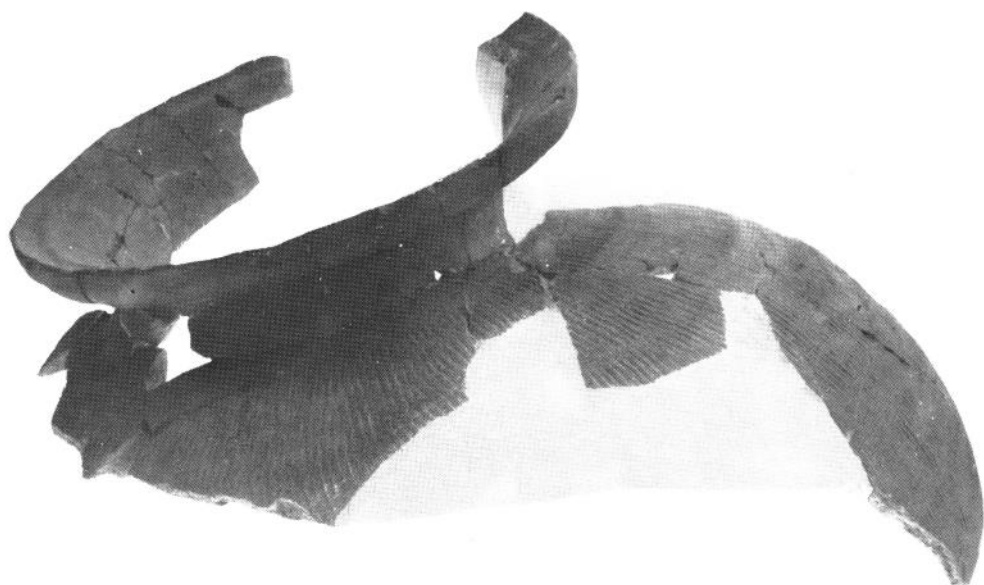
21 鉄 刀



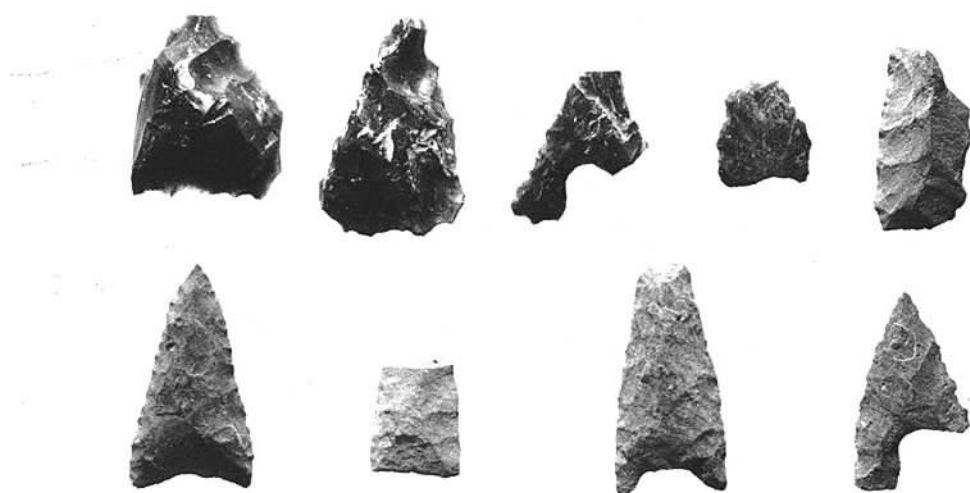
23 滑石製 紡錘車











脇田山古墳

所在地 福岡県粕屋郡粕屋町大字大隈字脇田山



第1図 脇田山古墳附近地形図

脇田山古墳

所在地 福岡県粕屋郡粕屋町大字大隈字脇田山

1 環境

福岡市を起点に東に向う国道 201号線と、粕屋郡古賀町と筑紫野市二日市とを結ぶ県道二日市古賀線が交差する門松の北方約 750m程で、水田からの比高は約25m程ある丘陵頂部に営まれた古墳である。

さらに詳しく見れば、篠栗町の飯盛山・久山町三頭山を結ぶ山脈から西に派生する低丘陵地が粕屋町大隈に終る地点にあり、部木山を北に、丸山を西南に、新屋の丘陵を東北に置き、南は篠栗川とその平地を控え、川の南には篠栗町乙犬の段丘とその向うに乙犬山とに対する、展望佳良な土地に位置している。調査の結果、羨道が東に向くことから、この立地が周当に準備された事が考えさせられる。

本古墳の周囲には35基からなる井山古墳群・前方後円墳2基、円墳4基からなる焼地山古墳群が南に、大隈部落西側丘陵にも4基の古墳群が見られる。また西南の駕輿丁地畔の奈良朝寺院跡、古大間池畔の滑石製玉類の製造所跡、東北方のブラザー工業敷地内の箱式石棺群、北の部木山の弥生期カメ棺群等の多数の遺跡に囲まれて、古代粕屋の重要な地域であったことを物語る。

2 構造

外部構造としては、脇田山の第3紀水成層を基盤にして、浅く掘られた周濠をもつ2段築成の円墳である。後年に至り耕地化されたことがあり、濠の幅員及び深さについては、本来の姿を留めていないものと思われ、墳丘も内部の石室構築の石材を抜かれているため、高さを減じて、低平な姿となっている。したがって墳丘上に葺石の有無も不明であり、墳丘裾の護石も不明であるが、羨道から東に長く伸びる墓道端の墳丘裾と合致する所の墓道埋土上に一列に礫が並置されていたことは、墓道を限る意味のみではなく、本来あった墳丘裾の護石の名残りかも知れない。内部構造は過去に石材が抜き取られてはいるが、単室の横穴式石室であり、羨道部天井石は残されているものの、玄室は側壁の半分より上は完全に失われて本来の状況を知る由もない。

石室は基盤に東西6m・南北4m・深さ1mに掘り込まれた土坑内に作られ、土坑東辺の稍南寄りに東に向って長さ7m・幅1.5m・深さ0.6mにわたって墓道が続く。

横穴式石室は、この墓坑内に内法3.3m×2mの玄室と長さ2mの羨道から構成され、玄門

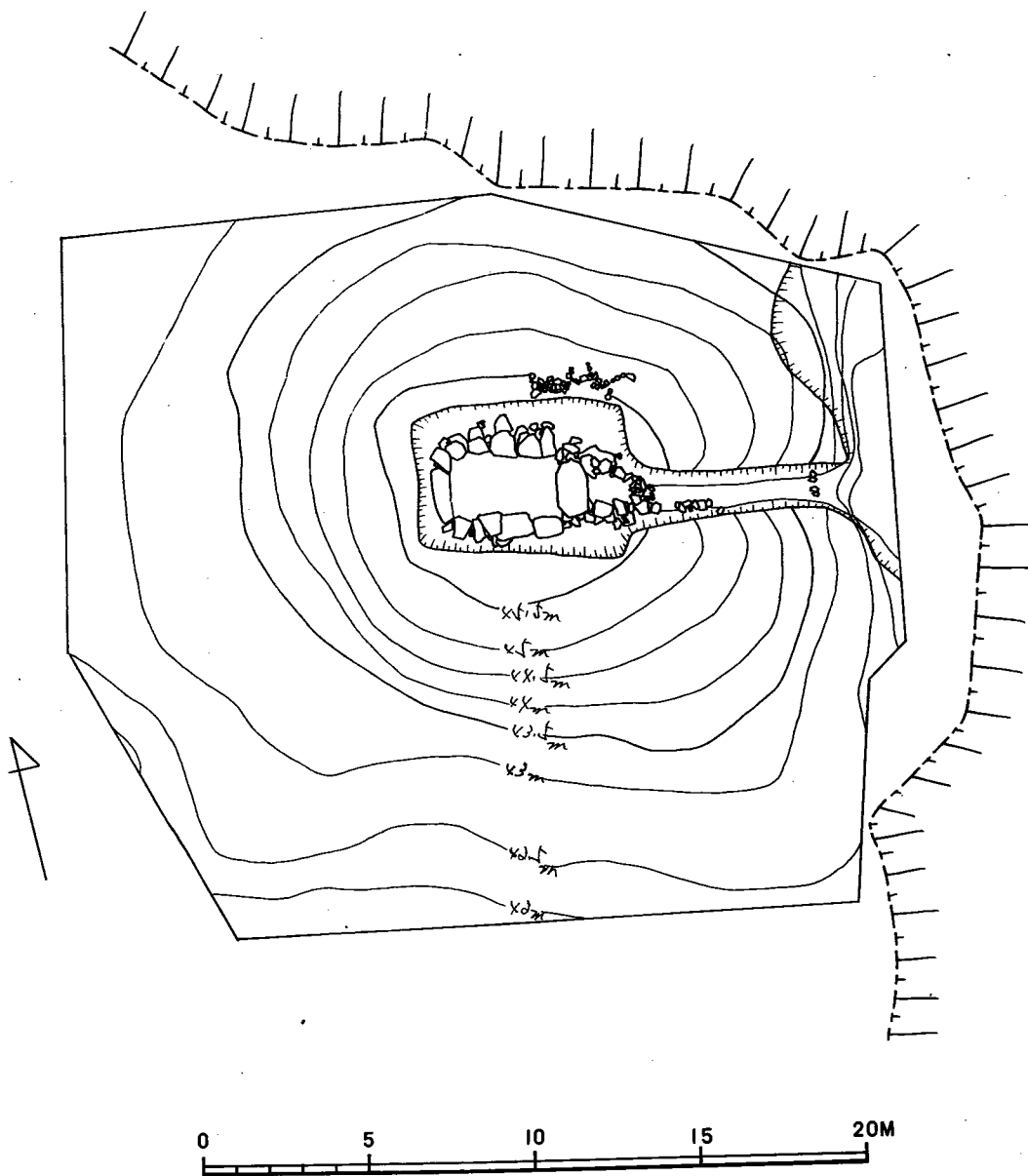
部天井石が上部構造として残っている。

玄室床面には稍偏平な礫を西南隅を除き一面に敷き、副葬品は、この礫床上に検出された。

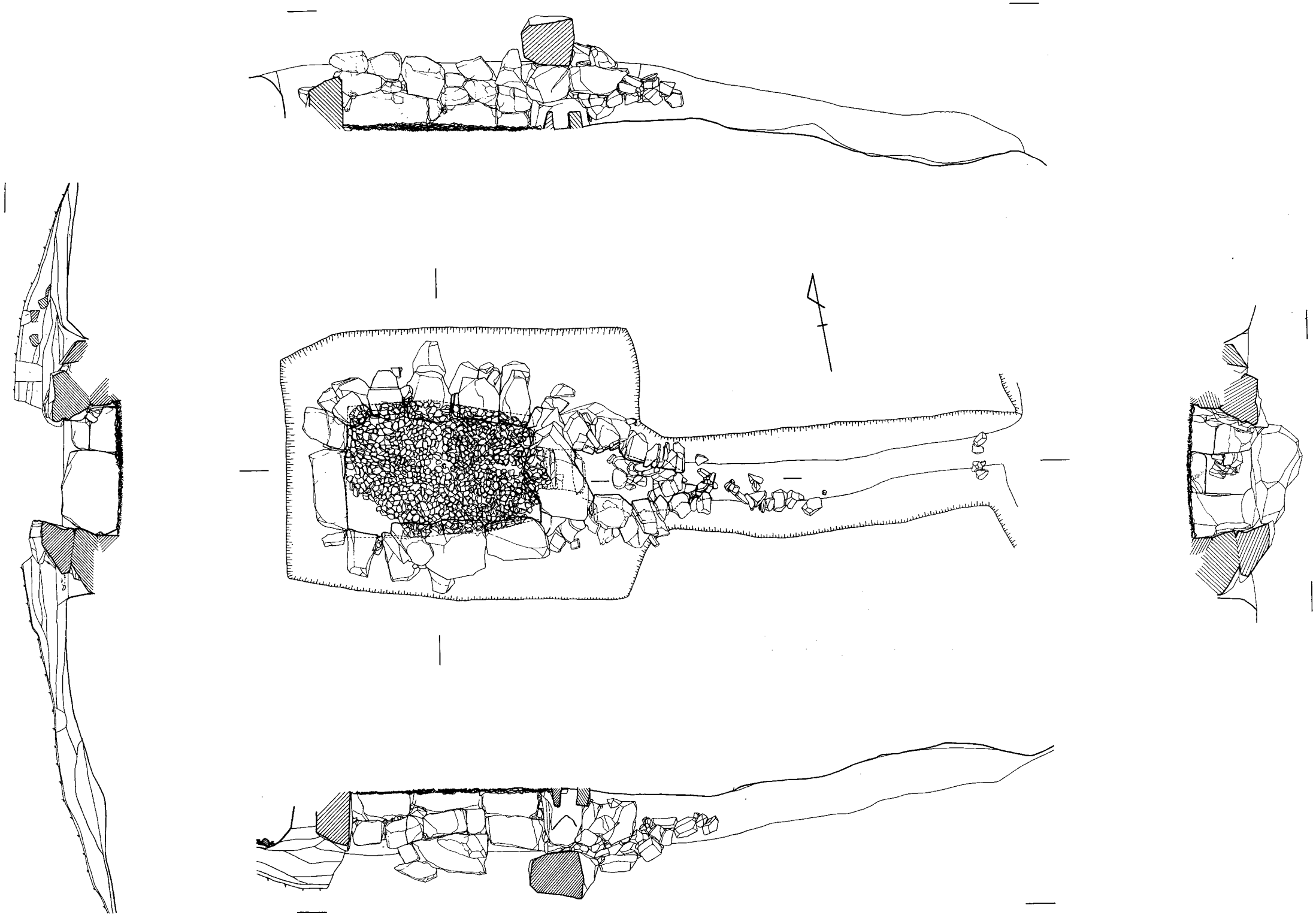
羨門は礫を積み上げて閉塞してはいるが、閉塞石の高さは、さほど高くなく充分に閉じたものとは言い難く、閉塞は下部を石で、上部は土砂で閉じたものと考えられる。

内部構造に使用された石材の大部分は砂岩であり、一部に礫岩が使用されている。

また、羨道床面には框石から少し離して平石が羨道の幅一杯に立てられて閉塞石との間に一区画を形成しているが、ここからは何らの遺物も認められなかった。しかしこの様な例は津屋崎町大石の「岡の前古墳」においても認められ、追葬時の遺体安置を考えての事かも知れない。



第2図 脇田山古墳墳形実測図



第3図 脇田山古墳内部主体実測図

3 遺物の配置

墳丘 墓道から石室に向って右側の封土上に須恵器甕の破片、墓道の肩に近く須恵器蓋付埴が見られた。

墓道 墓道の羨門閉塞石外に床面直上に須恵器甕・同杯・埴・高杯・土師器杯等が破碎して遺存した。墓前祭に関するものと考えられる。

玄室 石室上部が失われる程の大破壊を受けているので大部分の副葬品が散乱して検出された。しかしながら側壁遺存度が北側より南側が高い事から、北側壁が先ず破壊され、封丘の土砂がこの部分から落ち込んだと見え、南壁に近く直刀が当初の姿を留めて残り、玄門側の南北両隅も土器類・馬具類がよく残されていた。玄門側北隅は馬具類が敷石上にあり、一括して置かれた土器類は敷石上15cm程高く間に土砂を挟んだ状態で検出された事は、数次にわたる追葬の際に開口にともなう土砂の流入があり、その上に置かれたものと思われる。玄門側東隅にも、須恵器脚付壺・提瓶・杯が転倒して遺存したが、須恵器広口壺口縁部の破片が共にあり、この破片は北隅に置かれた壺の破片であった。

奥壁に近く須恵器杯が床面から浮き上って検出されたが、蓋と身が離れ、埋葬当所の姿とは言い難く、武器類は直刀一振を除き破片となっていて、何れも原位置を離れたものと考えられる。

4 遺物

装身具類

玉類 水晶製勾玉1個、玄室南壁寄りの奥壁側に直刀柄部に稍近く敷石上に遺存した。透明な小形の勾玉で、緒孔の両側には玉磨れによる磨滅が認められる。

水晶製ソロバン玉1個、径12ミリ・長さ9ミリ最大径の部分が稜を形成する透明なソロバン珠形をなしている。

水晶製丸玉2個、径10ミリ程の透明な丸玉である。

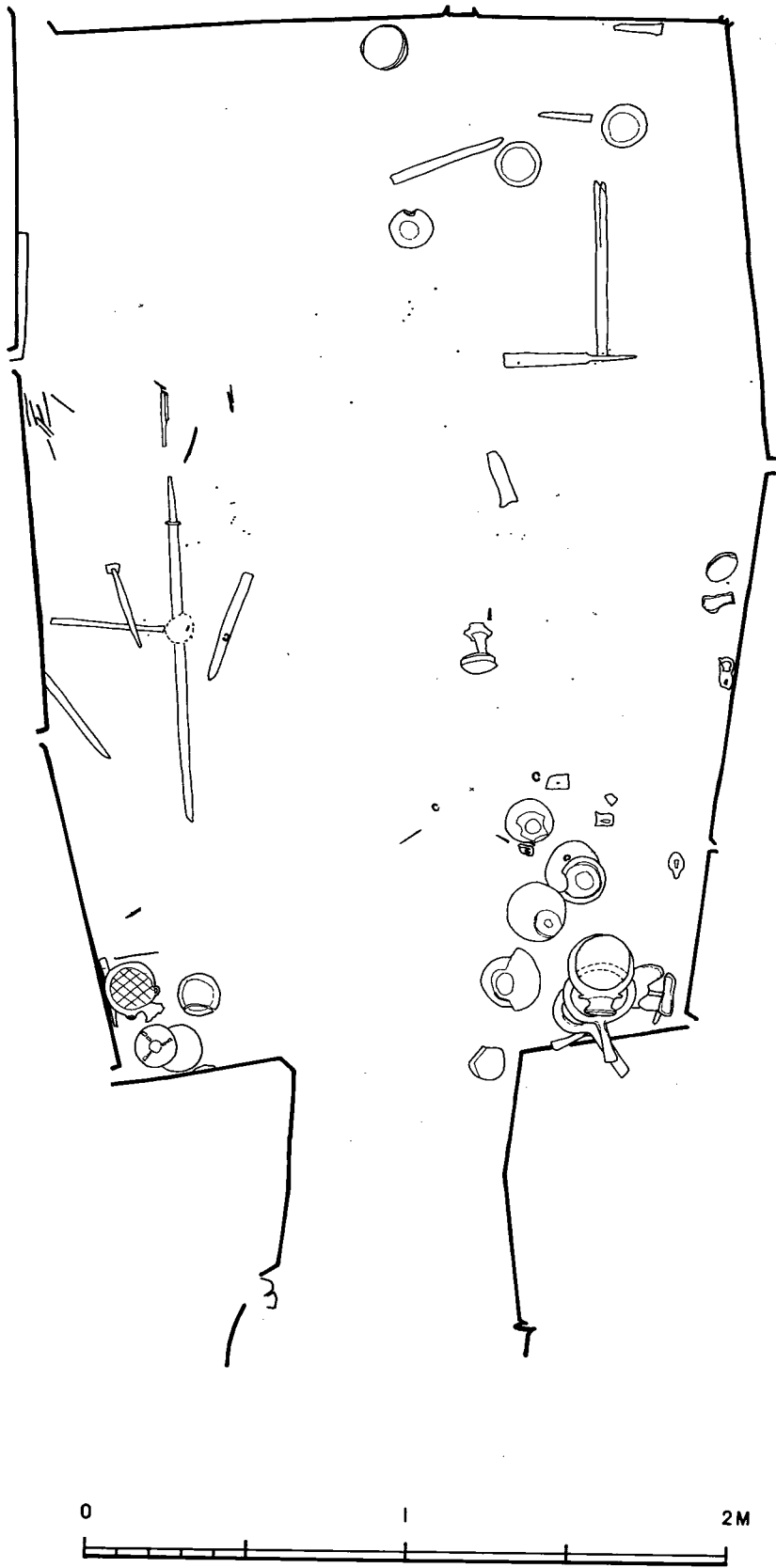
ガラス製丸玉2個、濃紺色のコバルトガラス製、径11ミリ、多少歪がある。

ガラス製小玉42個、大は径8ミリから、小は径3ミリまでの大小あり、コバルト色・青色・緑青色・黄色のガラス小玉である。

黒石製小玉1個、径9ミリの黒色石製である。

黒土製小玉1個、径8ミリの黒色土製のヌバ玉である。

管玉 大は径10ミリ・長さ29ミリから、小は径4.5ミリ・長さ15ミリに至る碧玉製管玉12個と、白色がかった薄緑色の光沢の少ない石製で径9ミリ・長さ21ミリと、径6ミリ・長さ23ミリの2個の管玉が本古墳から検出された玉類の全てである。



第4図 脇田山古墳遺物配置図

耳環 総数12個、2個は形が不揃いであるが、他の10個は対をなし、この内2個は小形で何れも銅地に銀を巻いた痕跡を留めている。

武器類

直刀A 刀身長、芒子から刃関まで92.5cm現存中茎長15cm、関部身幅4cm、目釘穴1ヶ、平造りの大直刀で、腰で稍内反りの気味である。今は分離しているが、倒卵形の鐔をもち、ハバキ金具は幅広の倒卵形であり、刀身に柃目の鞘の木質痕を留めている。

直刀B 刀身長47.5cm、芒子欠落、推定49cmの刀身に鐔とハバキ金具をもち、中茎も中ば以上を失ない長さは不明。刀身は稍ふくら張る平造りである。

その他の直刀 推定2振分の直刀身があるが、全長を明らかにし得ない、鞘の木目の錆着を見るものがあり、全て平造りである。

短刀C 芒子を欠く刀身長21cm、推定22cm、中茎長7cm、刀身幅22mm、棟厚5.5mmの平造りである。中茎に控目釘穴共2ヶの目釘穴をもち。

短刀D 刀身長23.3cm、中茎長7.5cm、刀身幅22mm、棟厚5mm、棟・刃共に関をもち、これに近く1ヶの目釘穴をもち。

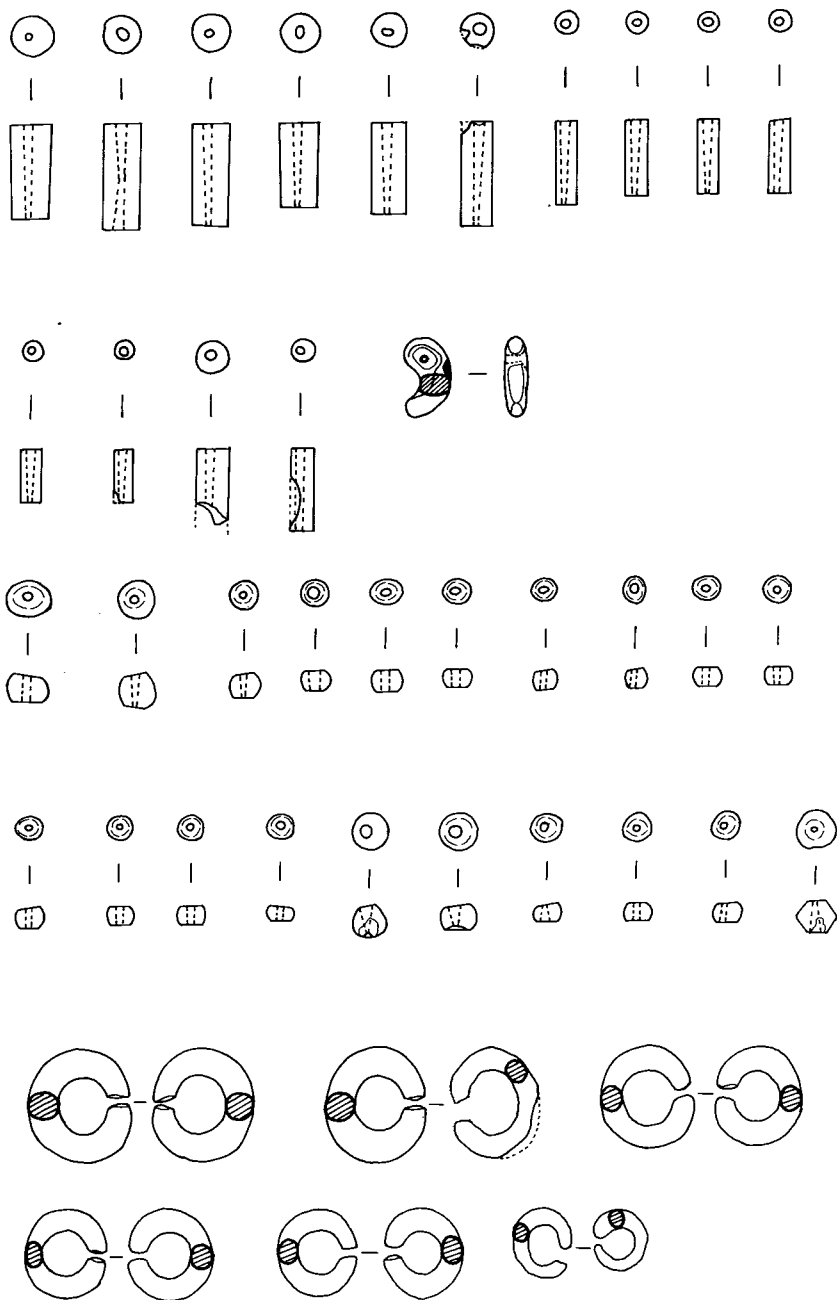
鉾 全長36cm、刃渡り19.5cm、刃幅28mm、断面菱形をなす両刃造り、袋部は基部に向って漸次開く円筒形をなし、基部径33mm、7mm程入った所に目釘が残り、その周囲は木質が錆着している。

鉾石突 全長20.8cm、基部径33mm、細長い円錐形をなし、袋部は鍛造時の合せ目が見られ、基部から8mm程入った所に目釘が残っている。

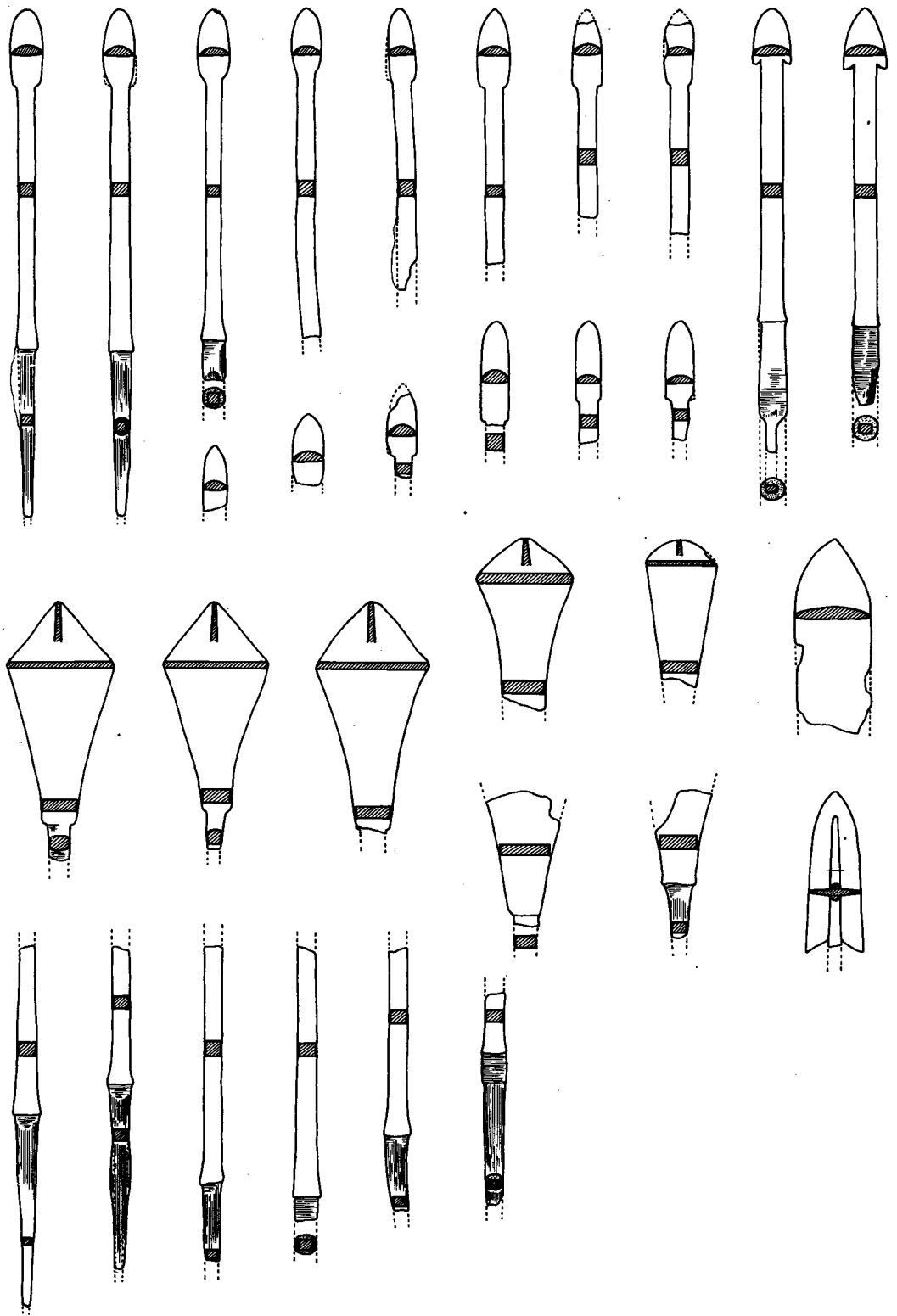
尖根鎌 紡錘形をなし、断面は薄い半円形なる尖端部に角棒状のノカツギが続き、尖端基部に逆刺をもつものがあり、ノシロ表面桜皮巻が認められるものもある。

広根鎌 剣菱形・先の丸い揆形・剣先形の三種類がある。何れも断面は偏平で、全長の明らかなものはない。

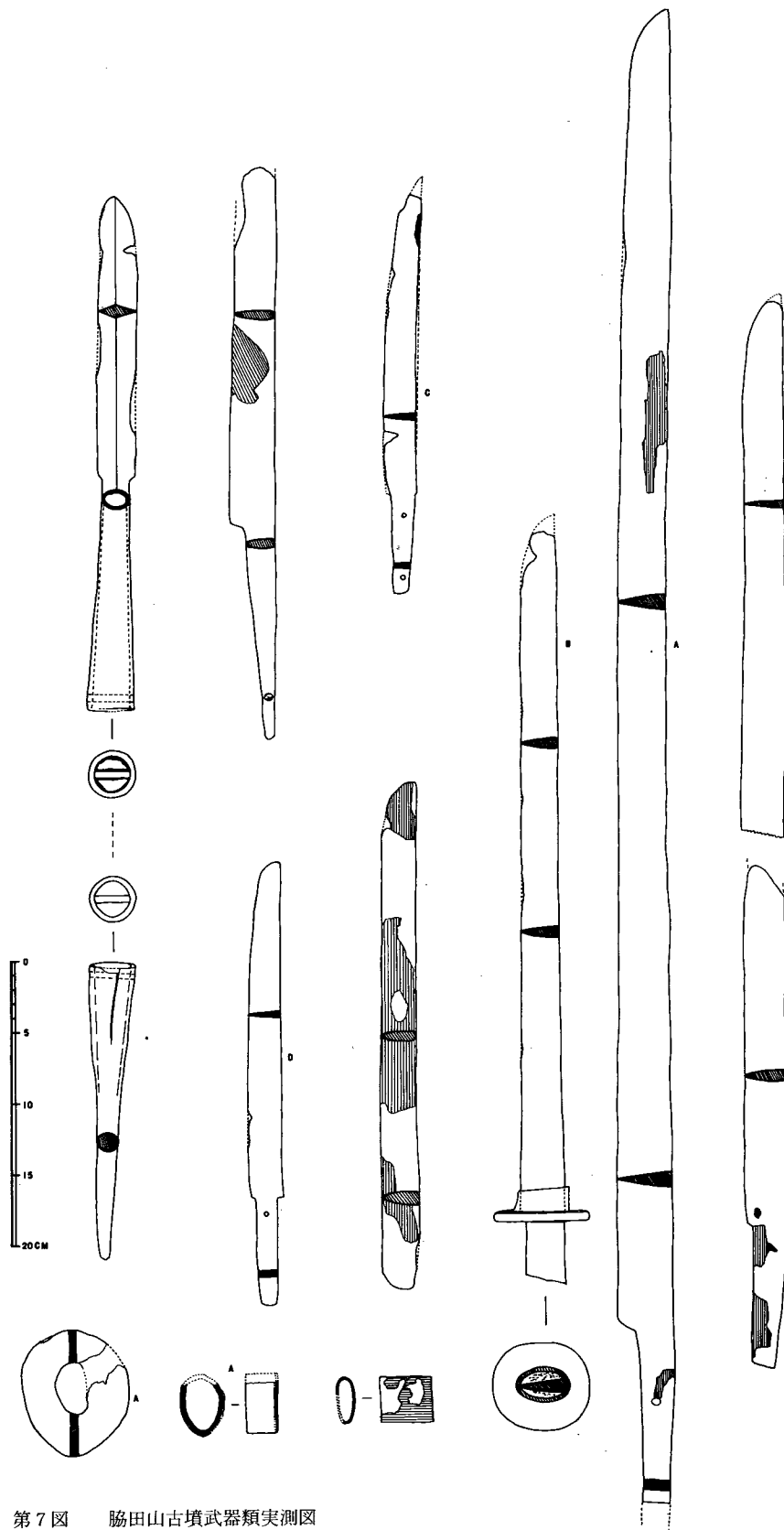
無柄鏃 剣先形で基部は逆刺を形成し、矢柄が鑄着している。中央部に矢柄を糸で綴着けた形跡が見られる。



第5図 脇田山古墳装身具類実測図



第6図 脇田山古墳鉄鏃実測図



第7図 脇田山古墳武器類実測図

馬具類

クツワ A 鏡板は楕円形鉄板の短径側の下端を弧状に切欠き、上方は小方形突起を作る。この部分に面繫の革帯の端を綴じ付た形跡がある。喰金具は鏡板の中央の方形孔に端の輪を出し引手金具を二重の円環を介して連結している。

クツワ B 偏円形鉄環の偏平部に長方形の面繫止の金具が一体に作られた、鏡に喰金具の輪と引手金具の輪が連結されている。

クツワ C 破碎著しく全形不明である。Bより稍細目の輪を用い同形式のものである。

尾錠金具 2筒からなり、全長約7cm、基部37mm、止金具は基部端から2cmの所に周金具の孔に差し込まれた軸と一体に作られ、周金具の一端は大きく輪をなしている。

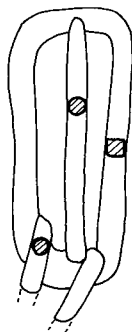
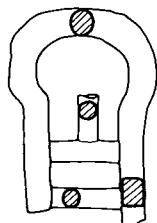
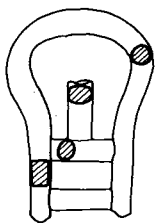
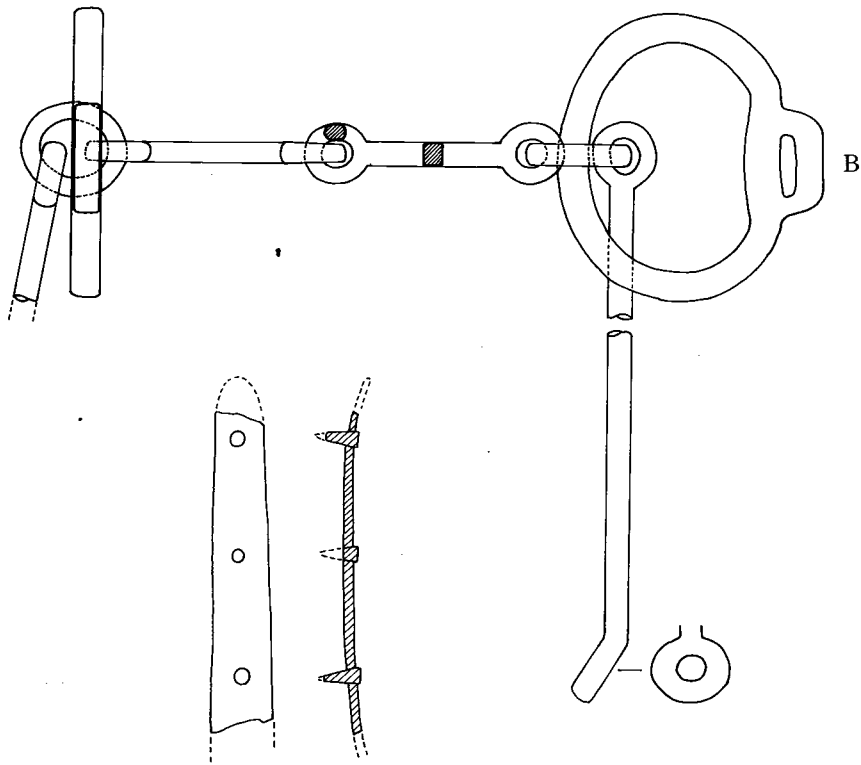
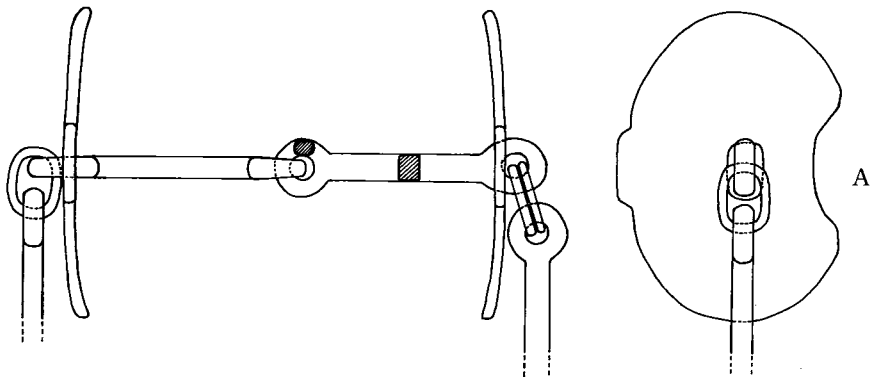
兵庫鎖 A 小形の二重環を連結した構造であり両端を失っている。

兵庫鎖 B 一端に大形の長方形に近い尾錠金具を付け、本体は長さ95mm、輪径30mm、鎖径9mmの二重鎖が2段からなっている。これは錠を懸垂するためのものと考えられる。

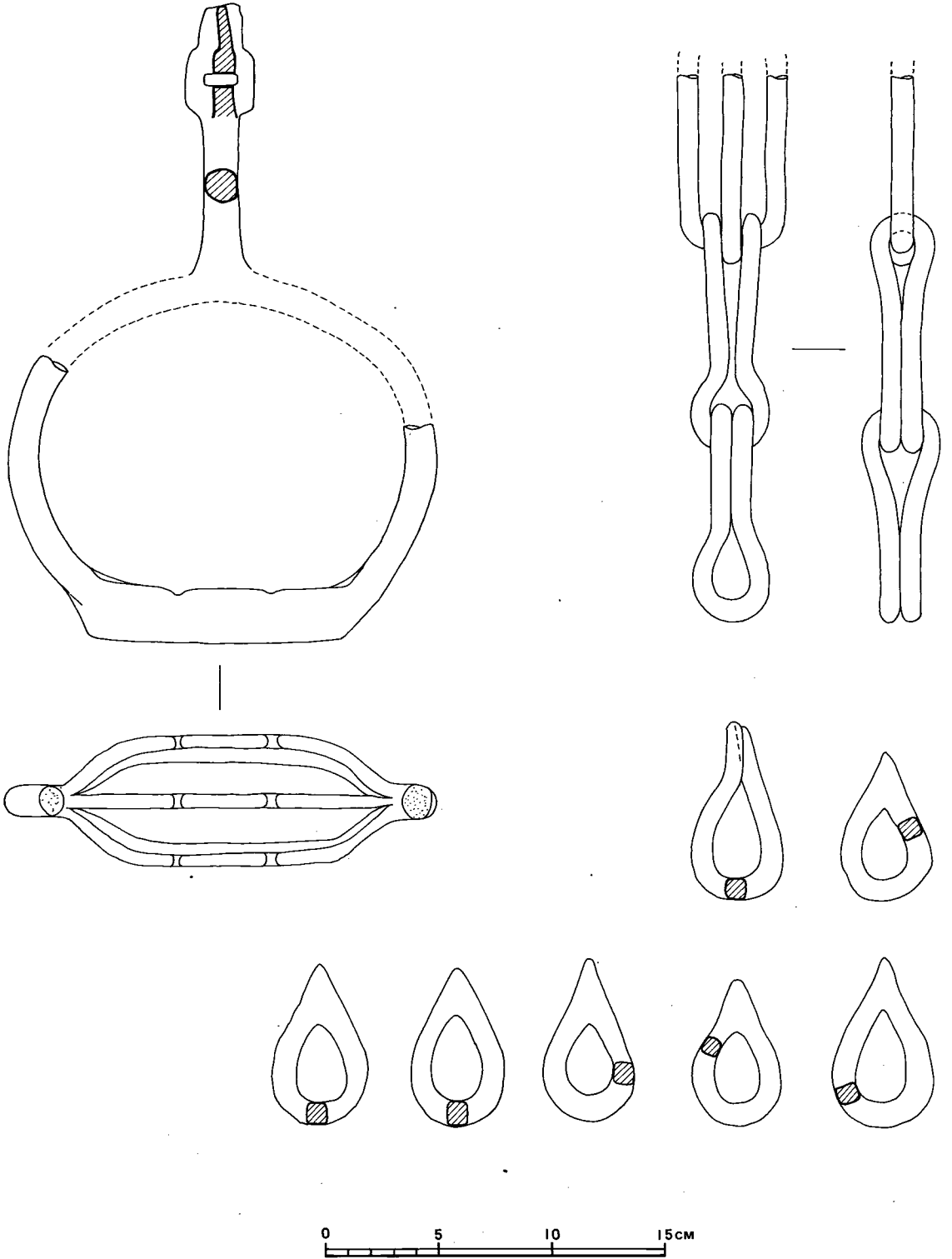
輪錠 最大径19.5cm、内径15.5cmの鉄輪に長さ11.5cmの懸垂用腕金具を一体に作り出し、踏まれる部分、即ち足載せは両端で輪に合わせて連らなるように三本の鉄板で幅5.5cmに作られている。

鉄吊環 平面涙滴状に鉄角材を成形、鉄材の断面は方形であり、馬具の結索用環と考えられる。

鞍金具 薄い細長の鉄板で木部に釘着したものと考えられ釘が遺存している。



第 8 図 脇田山古墳馬具実測図



第9図 脇田山古墳馬具実測図

土器類

玄室内出土土器類

須恵器大形広口壺A 朝顔花形に開く口縁部と、球形の胴部からなる。口縁部は肥厚して段を有し、胴部中央以上は刷毛目による横走する整形痕があり、以下は平行刻目の叩文を有し、内面には同心円叩文を残している。焼成良好で一部に自然釉を見る。

須恵器大形広口壺B 前者と同形同大であるが、口縁の中程に二条の沈線を施し、口唇部との間に連続波状文が見られる。胴部中央以上に刷毛目の横走する整形痕が見られるが、それ以前に施された平行刻目叩文は消えていない。内面は同心円叩文を残し、焼成良好で器表に自然釉を見る。

須恵器高台付長頸壺C 裾広がり脚部は横走する竹節状の段により三段に区切られ、上の二段は全周を三分割して梯形の透孔をもつ、脚部に載る壺は偏球形胴部の中央部に二条の沈線、その下に斜行櫛歯押捺文を施し、下端を一条の沈線で区切る。長い口縁は外に開きながら口唇では逆に内反する。焼成は良好で器の上面は自然釉の風化した痕跡が見られる。

須恵器壺D 平らな底面から直立する胴部は上部に至るに従って細くなり頸部で最小径となる。口縁部は頸部から上に行くにつれて強く外反し、口唇部は肥厚する。底部から三分の一の高さから二条一組の沈線が四段に等間隔に施され、頸部直下は斜行櫛歯押捺文、二三四段は同じ施文具による連続波状文を施している。焼成は良好で堅くしまり、酒の徳利を思わせる器形である。玄室中央北寄りに単独に置かれていた事はこの位置が数度目に埋葬された遺体の脇にあたり、あたかもこの被葬者が携えて黄泉の国に赴いた感じすらいだかせる。

須恵器広口壺E A B 両広口壺と同形であるが、稍小形で頸部も少し短小である。球形の胴部中央以上に横走する刷毛目の整形痕をもち、焼成は良好である。

須恵器横瓶F 平底の偏球形を呈する胴部に一方に偏って口縁部が付けられ、外に開きながら口唇部に行くにつれて内反の気味がある。暗赤褐色を呈し焼成は良好である。

須恵器俵形壺G 卵形の胴部は底部で一直線に切られ、横に口縁部が付けられている。製作に当っては、平底に粘土紐を巻き上げ、表裏から叩き締めながら、一端の切れた卵形に仕上げ、最後に上部の孔を薄い円板で閉し、胴部に穿孔して口縁部を貼り付けて完成させている。焼成は一部に火廻りが悪く生焼けの部分も見られる。本器は墓道に遺存したものである。

須恵器提瓶H 偏平球状胴部に外開きの口縁部と鈎状提環を両肩に貼り付けた焼成の良好な提瓶である。

須恵器提瓶I 前者に較べて稍小形で偏平な胴部の片側が平らに作られ、この部分にヘラにより格子目状の刻目が付けられ、携帯時の便利さを考慮している。外開きの口縁をもち焼成は良好である。

須恵器蓋杯J 蓋は口唇内面に段をもち、口縁外側には沈線をもつ。杯身は口唇立上りの内面は稜をもつように作られ、ヘラによる整形と、蓋にT形の記号をもつ。焼成は良好、III B式に属する。

須恵器杯KL 両者とも口唇内面に段を有し、前者は口縁外側に沈線をもつ焼成良好な杯である。 III B式に属する。

須恵器杯M 深めの杯で「ぐい呑み」を思わせる器形で、焼成時の変形が見られる。

須恵器高杯N 杯部口縁外面に段をもち、高目の脚部からなる、杯部下面には刷毛目による平行整形痕が認められる。

墳丘・墓道出土土器類

大部分が墓道から出土したものである。

須恵器杯 一組だけが蓋杯として組合せられるが、他は上下の組合せが不能である。何れもIV式に属し、玄室内出土のそれより一時期後出のものである。

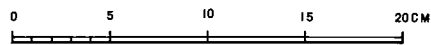
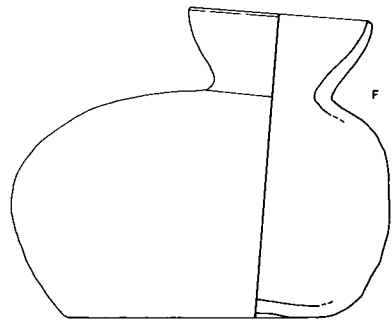
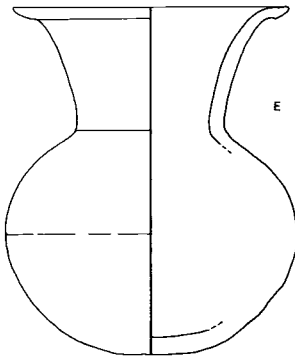
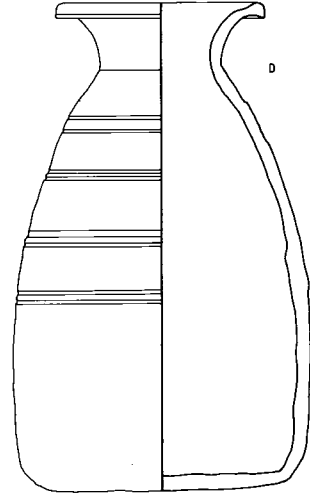
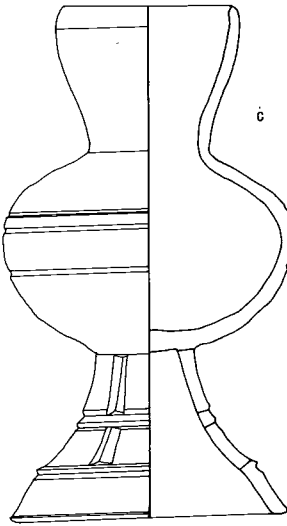
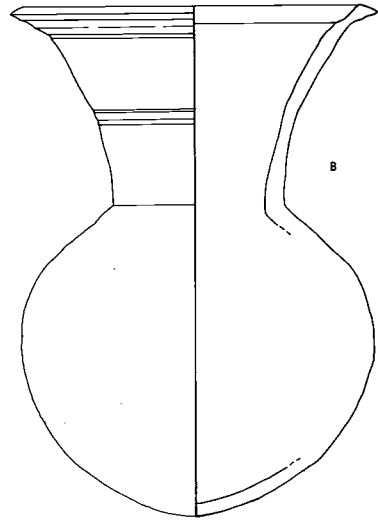
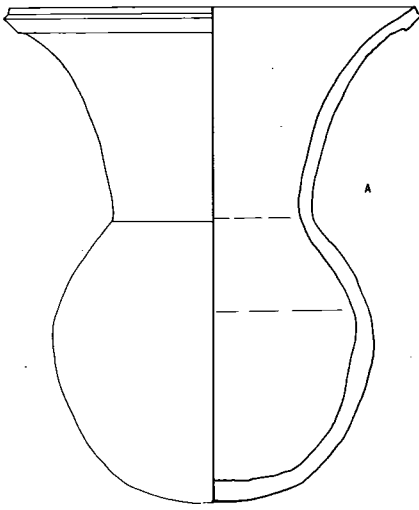
須恵器蓋付壺 墓道北側縁の墳丘上に検出された。焼成の稍不良な壺で、蓋を被ったままであった。壺の口唇にはIII B式特有の段をもち稍偏平の胴部からなる。

須恵器ハソウ 稍立上る口唇部と細く頸部でくびれる口縁に球形の胴部、この中央に二条の沈線を施し、この部分に径13mmの孔をもち、堅く焼成されている。

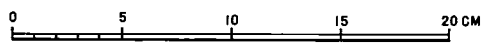
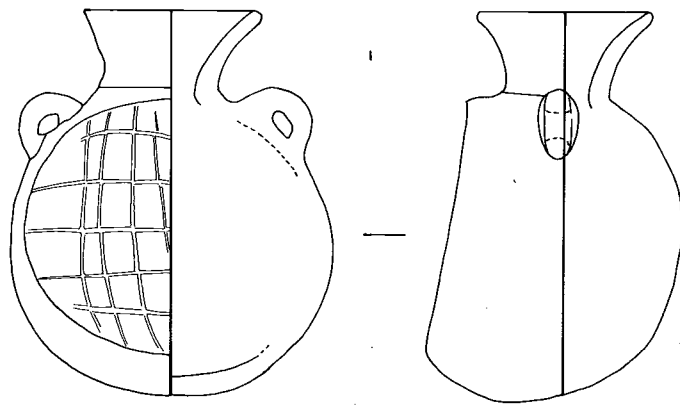
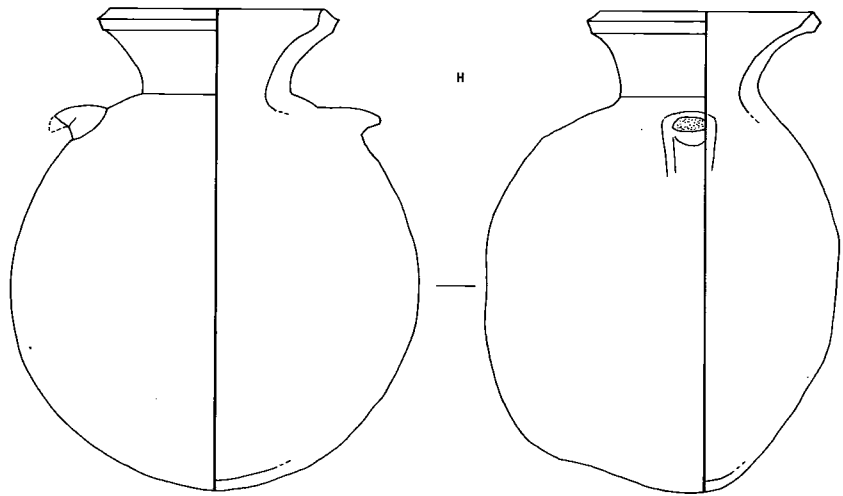
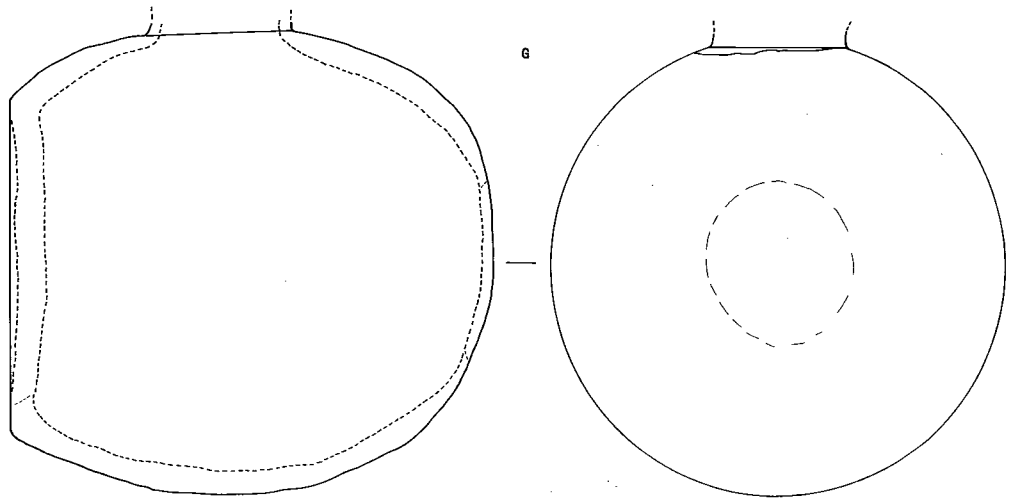
石製品

粘板岩製紡錘車A 半分を残すのみで、推定径58mm、厚さ8mmの磨製で中央に径7mmの孔を有する石製円板である。

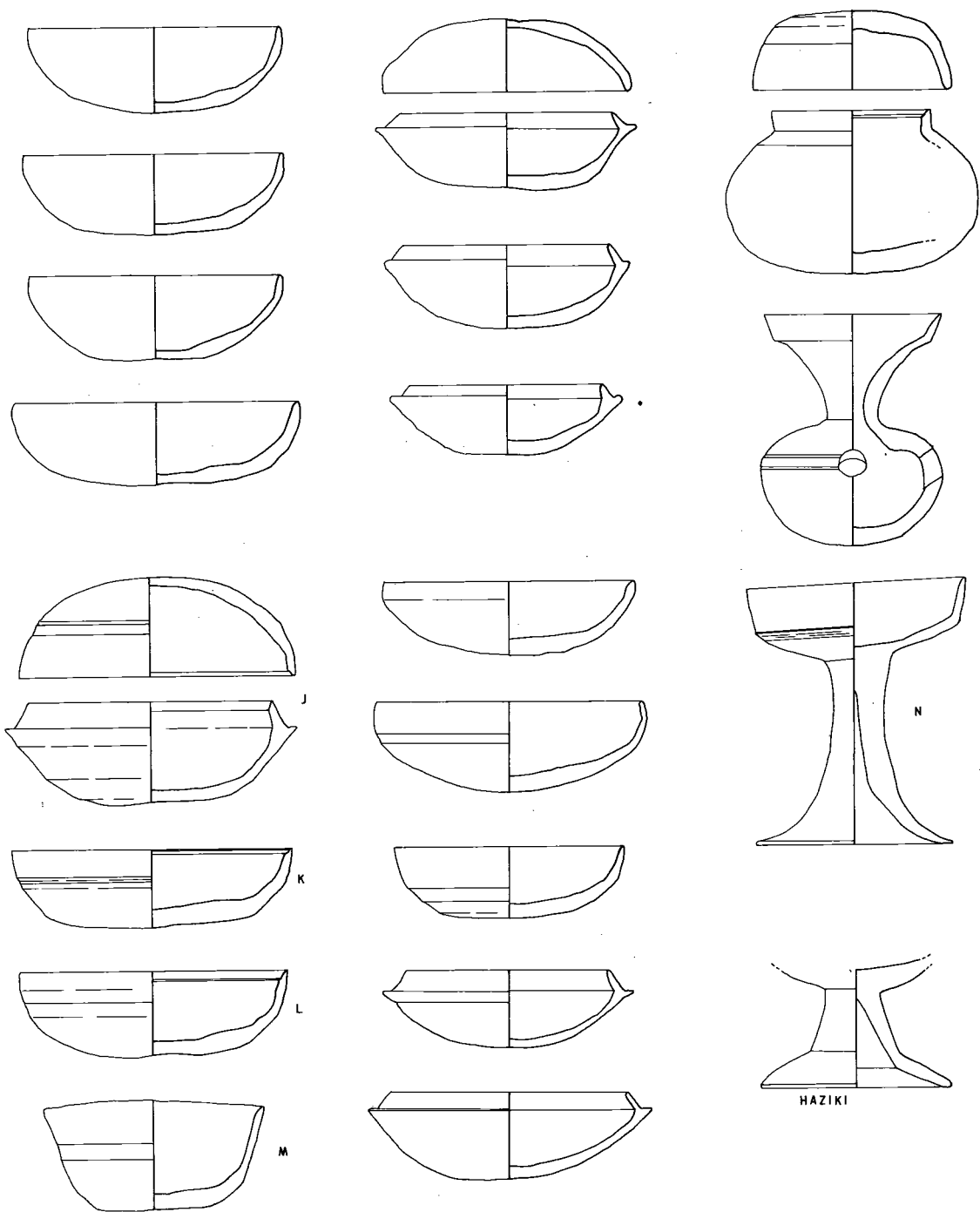
蛇紋岩製紡錘車B 滑石質に変化した蛇紋岩製で半分近い破片となっている。推定径48mm、厚さ6mm、中央に径6mmの孔をもつ円板状をなす。ABともに墓道埋土下部に検出された。



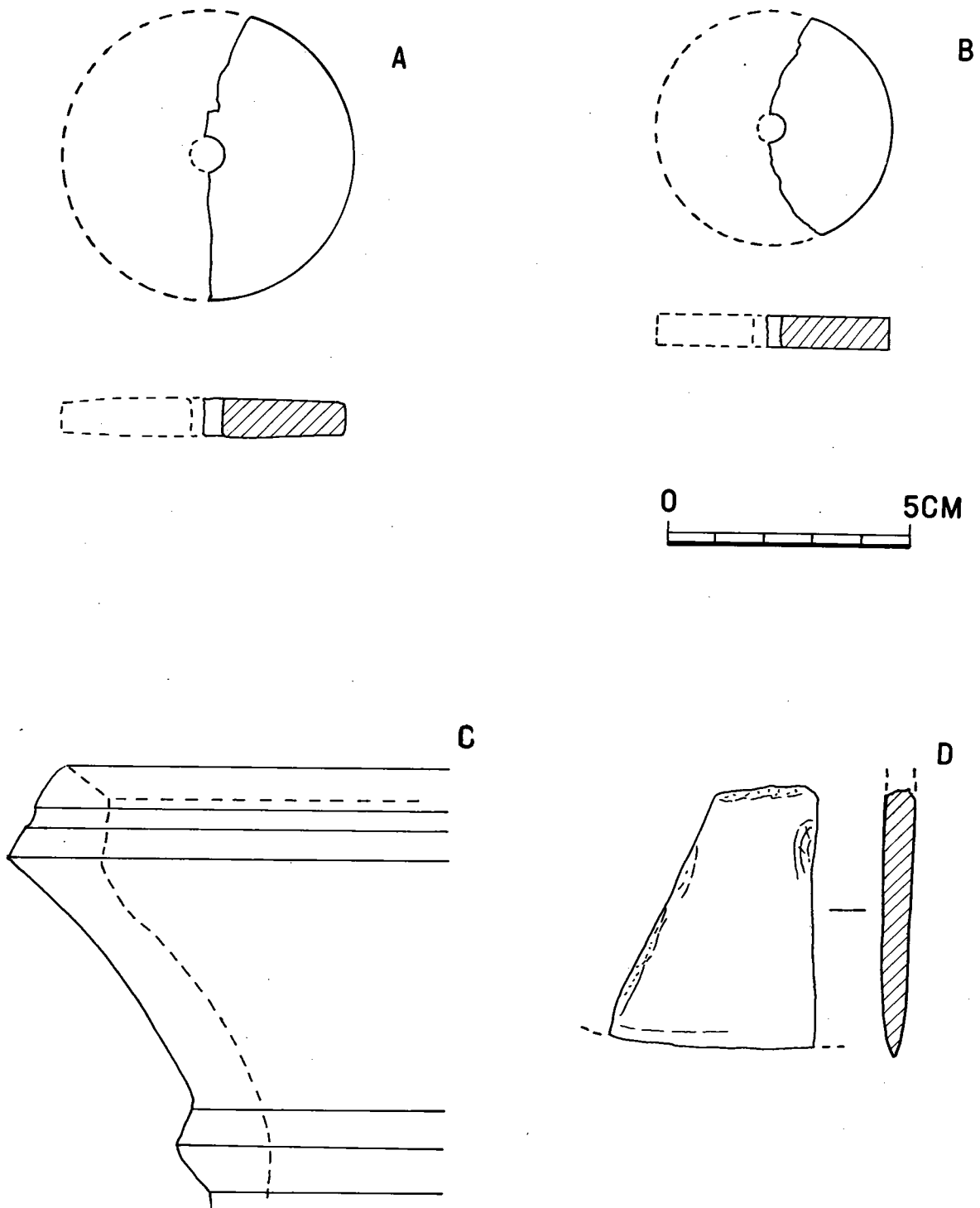
第10図 脇田山古墳出土須恵器実測図



第11図 脇田山古墳出土須恵器実測図



第12図 脇田山古墳出土須恵器実測図



第13図 脇田山古墳出土紡錘車 弥生式遺物実測図

5 考察

粕屋平野に臨む脇田山の景勝の地に東に墓道を向けて営まれた本古墳は、後年の石材採取により大きく姿を変えていた。しかしながら幸運にも、石室下部及び墓道は比較的改変が少なく、副葬品の配置等もその大体を知りえた。交通路整備にともない消滅したのであるが、その内容から見て粕屋地区における有力な氏族に属した被葬者達の奥津城として、独立して墳墓が営まれた事は至近距離に今は消滅した35墓からなる井山古墳、現存する焼地山古墳群とは篠栗川を隔てて別の氏族に属した事を思わせる。

本古墳の北に、これも今は消滅した新屋の古墳群があり、古い方では上大隈石棺墓、同丘陵続きにあるブラザー工業敷地内石棺墓群等との関連が、地域的にも重要となり、南の篠栗川と北の久原川に囲まれた地域が、本古墳の被葬者達の経済的基盤であったろう。

玄室内に葬られた被葬者が6人と考えられ、馬具のクツワが三頭分見られることは騎馬を常とした人が三人とも考えられなくはない。

武器を帯し、装身具で飾ったこれらの人々が葬られたのは、土器類で見ると須恵器のⅢB式の使用された時期であり、終りが同Ⅳ期であり六世紀中葉以降7世紀にかけての項であったろう。

本古墳の属する大隈地区の古墳立地が、新屋東側の山を主山に、遠く東方の三頭山連山を祖山とし、乙犬山を外青竜に、久原の森江山連山を外白虎に、朱雀の案山を下長者原の段丘にとり、篠栗川、久原川を明堂水に見たてた立地を示すことは、この地域において六世紀代には四神・風水観念が流入していたことを物語る。

6 その他の遺物

脇田山丘陵には、弥生後期の土器片、石製穂摘具、黒燿石剥片が検出されたが、後年の開墾、炭鉱掘削等の掘削等により何れも遊離して遺跡の存在した痕跡を留めるのみであった。

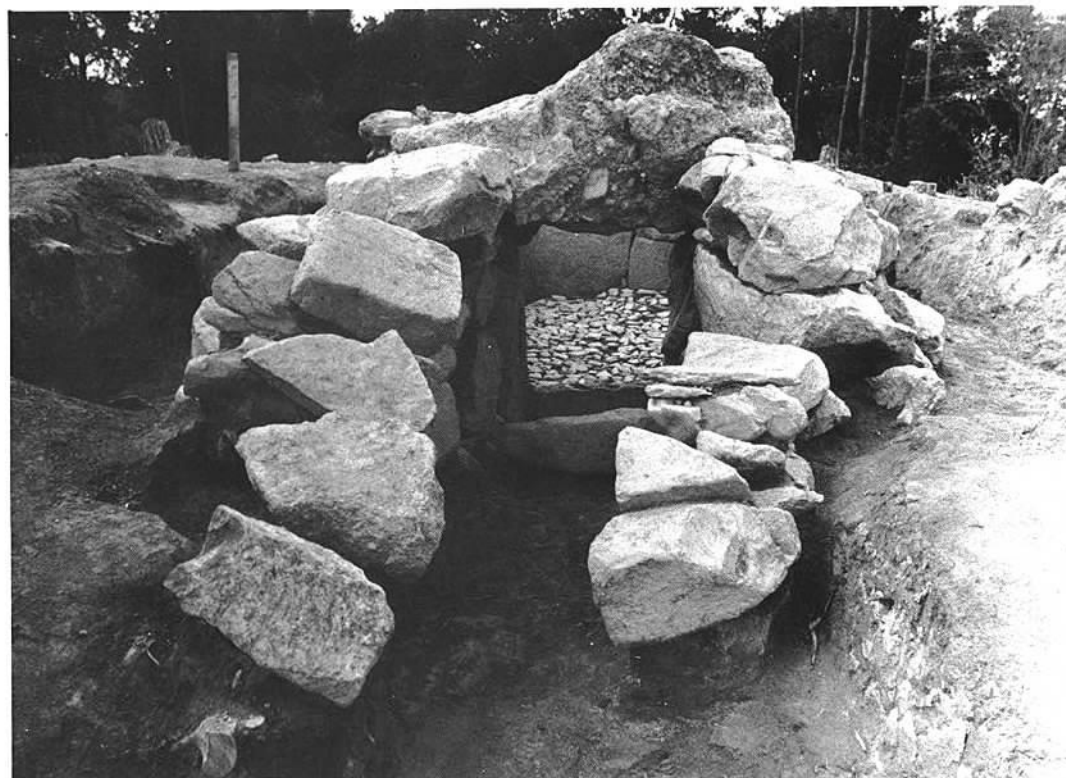
脇田山古墳図版



2 同 上 西側から見た墳丘



4 同 上 墓道と墳丘裾との置石（手前は羨道）



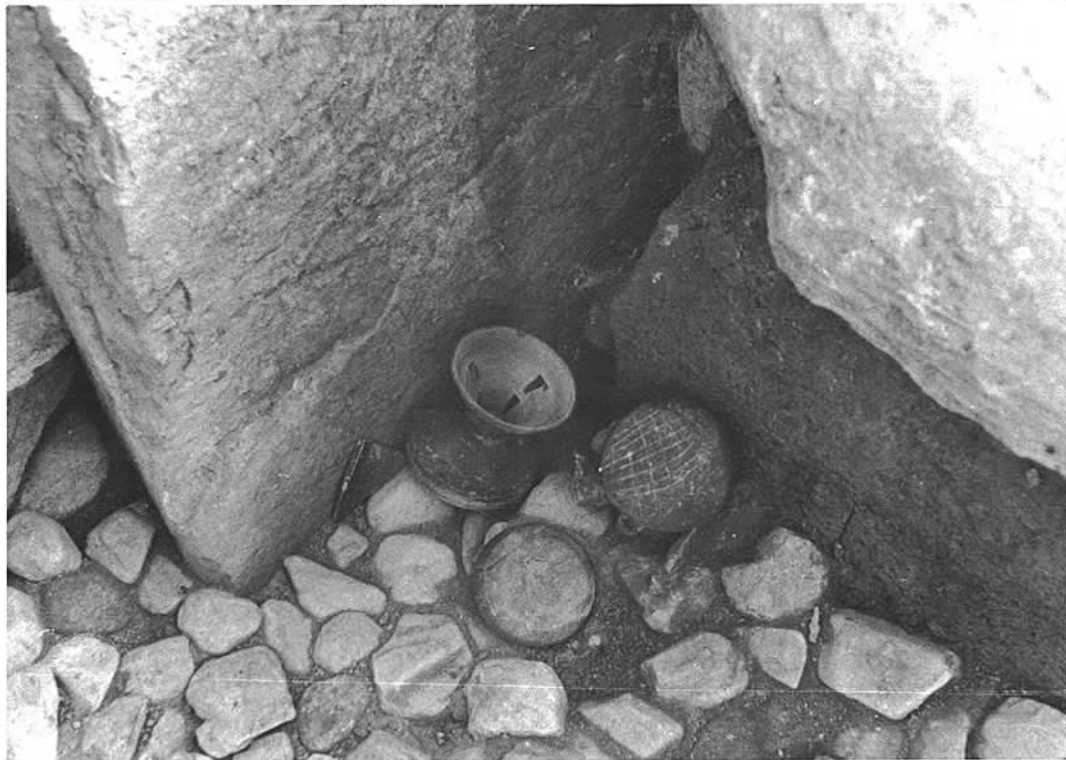
6 同 上 羨道



8 同 上



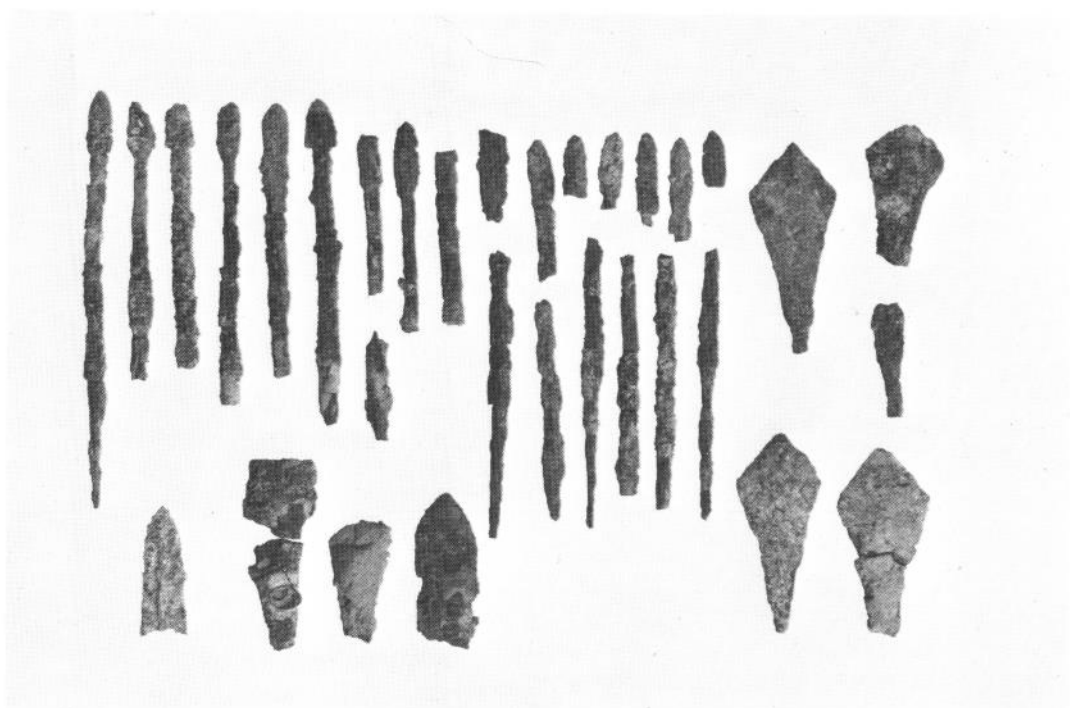
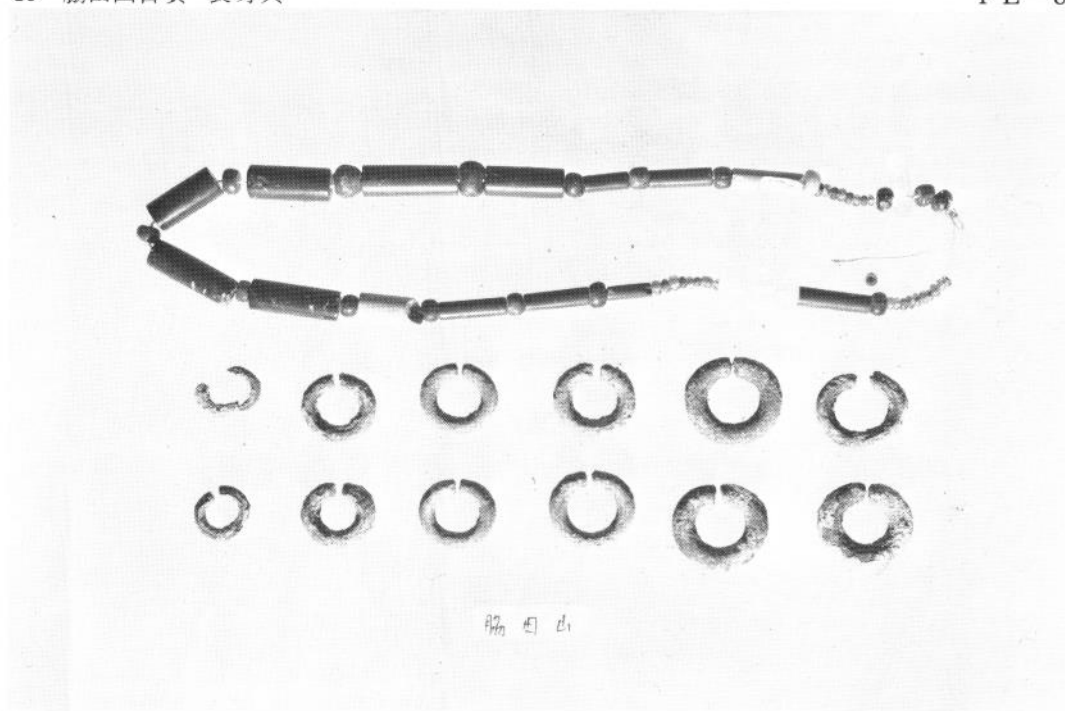
10 同 上

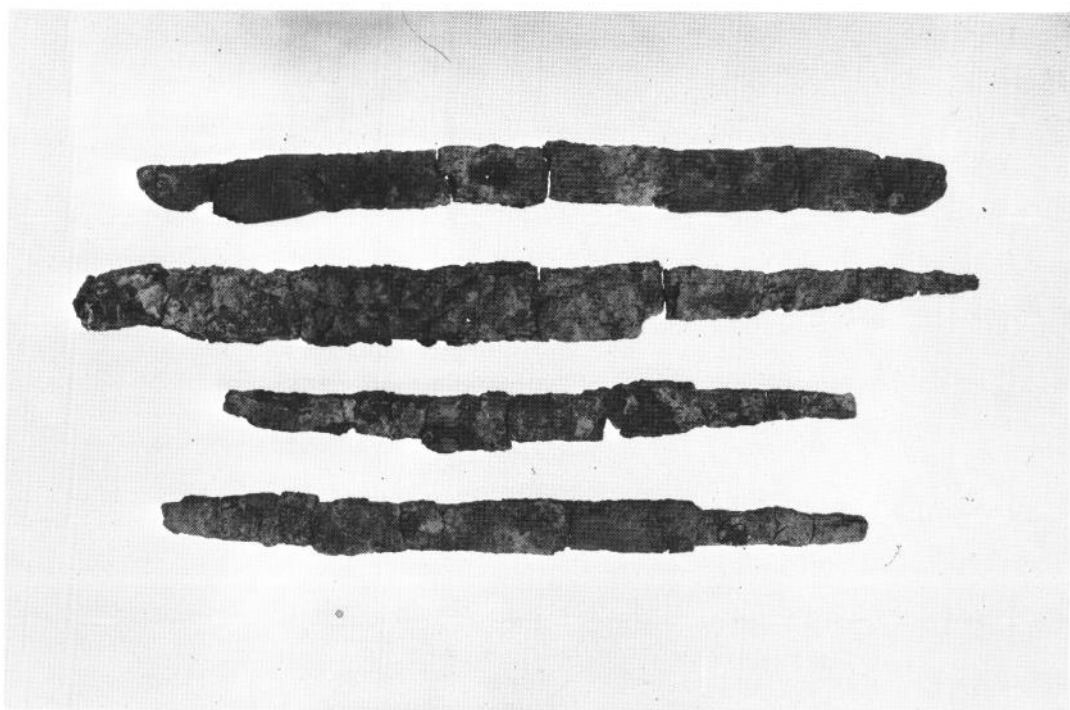
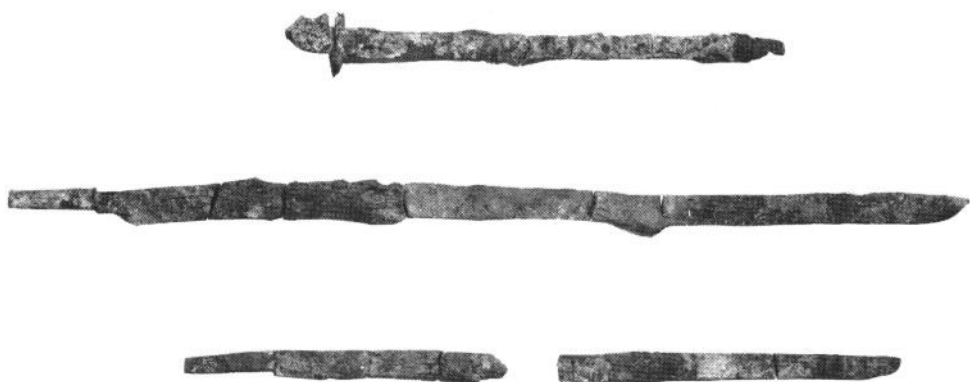


12 同 上

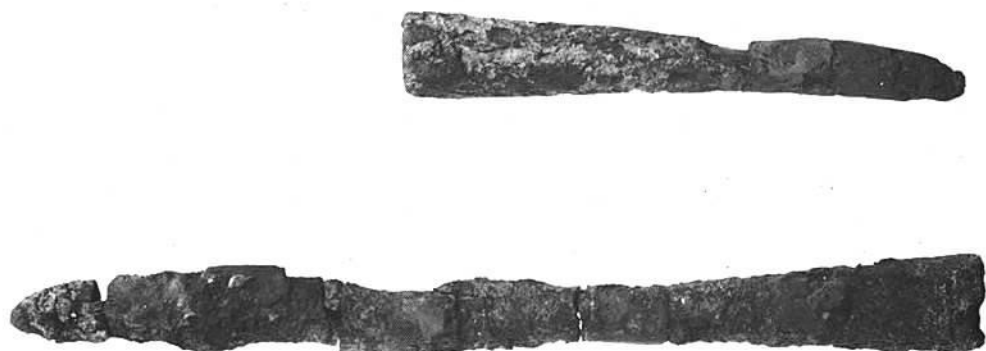


14 同 上



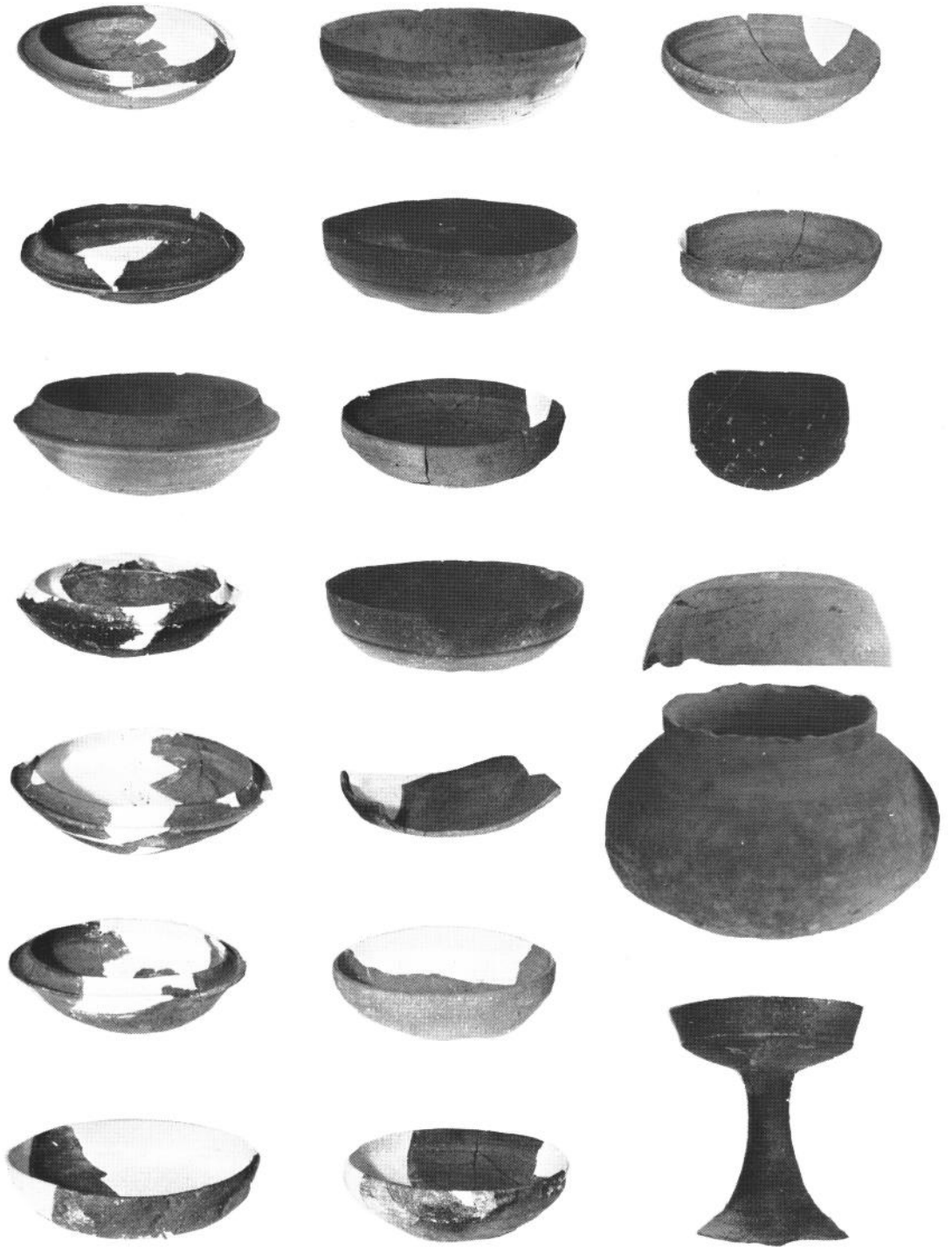


18 同 上













佐谷・脇田山・古墳調査報告

昭和49年4月30日

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6番29号
印刷 株式会社チューエツ
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号
TEL(代) 411-8367